

ス  
テ  
ッ  
プ  
ア  
ッ  
プ

## 目次

ステップアップ

5

降っても晴れても

179

ステップアップ

ふと窓の向こうへ目をやると、外はクーラーの効いた社内とは別世界に見える。このオフィスに日中、太陽の光が差し込むことはないが、今の時間、外はちょうどアスファルトに熱がたまり、上から太陽、下から地熱で暑いに違いない。

なんて外に意識が行くのは、やっぱり煮詰まってるんだろな。つい二時間前にお昼休みだったのに……

七瀬<sup>ななせ</sup>ひより、入社して二年目の夏。配属された企画部では、ようやく仕事を理解してきたところで、研修が終わった新人も下に付き、指導をしながら自分も改めて勉強している最中。一人前にはまだまだ遠い。

もう一度ディスプレイを見てから、こっそりため息をつく。目を閉じて目頭を揉みながら、今日の進め方を改めて考える。

もう残業コースは確定。ちよつとでも早く終わらせるには、ここががんばって進めるべきか、休憩して効率化を図るか……

「んー」

軽く伸びをしてから机の端にあるカップを手にとった。

「カラ……か……。よし、休憩に行こう！」

カップを手にしたまま立ち上がると、まずは給湯室へ向かった。コーヒーを入れてから、レストコーナーで一息つけば少しは頭も柔らかくなってくれるよね。

私が働いているのは、モバイル機器を開発する、大企業の系列会社だ。都内に自社ビルを構え、駅から徒歩五分。こんな好条件の会社に就職できたのは奇跡に近い。

七階建ての自社ビルは、偶数階にレストコーナー、奇数階に喫煙所のスペースがあり、それぞれに自動販売機が設置されている。

社員の意見を取り入れる社風で、有意義と判断された意見は社内会議にかけられる。そのため、社内全体での仕事意識は高く、大企業として発展を続けている。

転職なんて考えてもいないけど、仕事に煮詰まったりすると、自分は会社に貢献できているのか不安になってしまう。

給湯室でコーヒーのドリップパックにお湯を注ぎ、合い間に軽いストレッチをして体をほぐす。

仕事には慣れてきたけど、まだまだ手際が悪い。やるべきことはわかるのに、その手

順が上手く組み立てられない。思うように仕事をごなせてない……。同じ部署に同期はいないけど、他の人はもうちょっとちゃんとやっているように見えるから、余計にもどかしい。

反省をしながら、少しずつお湯を注ぎ足していると、ふと人の気配を感じた。入り口をパツと見れば、隣の部署、デザイン開発部の松浦さんが入ってくるころだった。下を向いていて、一拍遅れてから顔を上げた松浦さんは、少し驚いたあとにすぐに笑顔を見せて挨拶をしてくれる。

「七瀬さんでしたか、お疲れさまです」

「お疲れさまです」

入ってきたのが松浦さんで私の緊張も少し緩む。柔和な顔立ち、人当たりの良さそうな雰囲気と喋り方、穏やかな性格。人によってはのりくらりとした印象を持つかもしれないけど、社内においては仕事にも定評があるし、基本的に好印象を抱く人が多い。人と話すことに緊張してしまう私も松浦さん相手だとさほど緊張しない。

そんな松浦さんには社内でも変わった異名がついている。

『スキンシップ魔王』

私は挨拶を交わすぐらいだから、噂でしか聞いたことがないけど。男女問わずにスキンシップが多く、会話する時でも取るべき距離が異様に短いとか。セクハラな感じがする異名とは違い、実際はあんまり嫌がられることがなくて、むしろ喜んでる女子社員もいるらしい。

他の男性社員がすれば確実に嫌がられることも、松浦さんがすれば下心を感じさせない爽やかさで軽く受け入れられ、仮に嫌がる相手がいたら、その人とは一定の距離を置き、その後もその距離感を保つマメさがあるとか。そのあたりの絶妙さが『魔王』とつく所以らしい。

私のいる企画部は六階。デザイン開発部は同じフロアですぐ隣にある。仕切りなんかもないし、松浦さんと顔を合やす機会は多い。だけど、軽く挨拶を交わすぐらいで、会話らしい会話はあまりしたことがない。実は一度だけあったけど、多分、松浦さんの方は覚えてないと思う。

松浦さんも飲み物を入れに来たんだよね。少し疲れた顔をしているけど、松浦さんも私みたいに新人時代は悩んだりしたのかな。

この会社の仕事は企画部からデザイン開発部へと回っていく。連携しているし、松浦さんぐらいになれば、部署が違えどある程度はこっちの仕事も知っているんだろうな。今の企画も……ああ、やっぱり問題はあそこかしら。でも……そうすると……

松浦さんの新人時代なんかを想像しているうちに、結局は今煮詰まっている仕事のことで頭が一杯になってしまう。流しの前に立ち、松浦さんの持つカップを視界に入れな

がらも、頭では仕事のことを考えていた。

なんとなく、というより無意識に、松浦さんのカップへと手を伸ばしていた。同じ飲み物を入れるにしても一度はゆすいだ方がいいだろうし、自分が流しの前に立っていたから。

なかなか手渡されないから、カップから腕を目で辿り、松浦さんの顔を見ると少し戸惑っている。

「？」

「あの、えっと頼んでもいいんですか？」

目が合うと戸惑いの色は消え、再び笑顔になりすつとカップを差し出してしてくれる。

「はい、いいですよ」

つられて微笑み返して、ぼーとした状態から抜け出した。受け取ったカップの底にはコーヒーが少し残っている。軽く洗い流してふと思いついた。

「なんだか、疲れてそうな顔をしていますね。ココアにされますか？」

あえてそう聞いたのには理由がある。

返事を待つ間にカップを拭き終わった。少しの間をおいてから「お願いします」と、頭を下げられた。

棚には自分用のドリップコーヒーの他にココアや砂糖も置いてある。そのココアに砂

糖を少し多めに入れてからお湯を注ぐ。コーヒーの香りの中に、ふわりと甘いココアの香りが混ざる。

「なぜ、ココアにしてくれたんですか？」

二人分の飲み物の準備が終わると、松浦さんは自分の分のカップを受け取りながらそう聞いてきた。やっぱり、松浦さんは覚えていなかった。話すべきか少し悩んでいると、一口ココアを飲んだ松浦さんが更に問いかけてくる。

「これからレストコーナーへ行く予定なんですけど、ご一緒にどうですか？」

「私も行く予定だったんです。お邪魔でなければ、ご一緒させていただきます」

そう返すと、松浦さんは私の分のカップまで持ってくれた。一緒に歩き出したけれど、実は私はあまり誰かと一緒に休憩をすることがないし、仕事以外でこうして一緒に歩くこともない。緊張し始めた自分をごまかすために話し始めた。

「いつだったか、朝に時計を見間違えて、会社に一時間も早く来たことがあるんです。しょうがないからコーヒーでも飲もうと思って給湯室に行ったら、徹夜明けらしい松浦さんがカップになみなみとココアを入れてたんです」

松浦さんのことをそんなに知っているわけじゃないけど、コーヒーを飲んでるところしか見たことがなかったし、男性がココアを飲むのが少し珍しくて覚えていた。だから、疲れた時には飲みたくなるのかと勝手に想像をしていたわけなんだけど。

「あー、ありました。あの時、誰かと会った気はするんですが、何せふらふらだったもので……七瀬さんだったんですね」

「はい」

私の歩くペースに合わせてくれているのか、松浦さんの歩みは幾らかのんびりしているような気がする。その斜め後ろを付いていって、角を一つ曲がると、正面にレストコーナーが見える。

「さっき、一口味見をしたんですが、砂糖の量まで丁度よくて驚きました。多めにしてくれたんですね。ありがとうございます」

くるっと振り返ってお礼を言う松浦さんは、照れ臭そうな顔をしていた。いつもの穏やかな笑顔とは少し違う……初めて見る表情に、ちよつとドキツとする。

すぐに背中を向けて歩き出したから、いつもと違う笑顔を見れたのほんの少しだけ。背中を見つめている間にレストコーナーへ到着した。中には数名で話している他のフロアの人と、その人たちとは離れた場所にいる人が一人。同じ部署の相川さんあいかわだった。

壁に寄りかかっていた相川さんは私と松浦さんにすぐ気がついて、手を上げて飲んでいたペットボトルから口を離す。

「あれー、松浦さんと七瀬ちゃん。珍しい組み合わせだね」

「お疲れさまです。先ほど、給湯室で一緒になりましたね。お誘いしたんですね」

「さすが、『スキんシップ魔王』！ お手が早い」

相川さんが軽口を言うと、松浦さんは顔をしかめる。それを気にした様子もなく、相川さんは私の頭を軽く撫でて、ニカツと笑いかけてくる。

「その変な名前前で呼ばないで欲しいですね。悪いことをしてるみたいじゃないですか」

「今まで七瀬ちゃんと話してるのなんて見たことないですから。俺の大事な後輩に何かあったら困ります」

相川さんは、松浦さんと同じプロジェクトで仕事をしていることもあり、こんなふうになく会話をしているのをよく見る。

「失礼ですね。人がセクハラしているみたいないないでください」

「七瀬ちゃんは大人しいけど、軽い気持ちで触ったり、近づいたりしちゃうダメですからね」  
松浦さんはスキんシップ過剰から『スキんシップ魔王』なんて呼ばれているけど、私の方は一五〇センチにも満たない身長。それに加え童顔なのもあり、やたらと触られる。

飲み会の席でセクハラまがいのことをされることもあれば、ぬいぐるみのような扱いを受けることもある。頭を撫でられたり、抱きつかれたり。もちろん、そんなのを喜んで受け入れてるわけもなく、むしろ嫌悪すらしている。近づいてくる人の下心や、向けられる感情には敏感だし。同性に軽い気持ちで触られるのも苦手。その場で思いつきり嫌がるようなことはしないけど、そうなる前に人との距離を取るようになってきた。

相川さんは二期上の先輩で、去年の新人研修で私の担当だった。言ったことはないのに、私が人との触れあいを苦手としているのを察してくれ、他の人をさりげなく遠ざけてくれている。姉しくない私には兄のような存在。この会社でも気を許せる数少ない人。だから、相川さんからは頭を撫でられても嫌じゃないし、相川さんも抱きつくようなことはしてこない。年も近いせいか、仕事以外の話で盛り上がりたりもするけど、あまり深いところまで踏み込んでこない相川さんの距離感には助けられている。

「まったく、相川君は保護者みたいですね。はい、七瀬さん」

呆れた顔をしながら、持ってくれていたカップを手渡される。

「みたいなもんですよ」

立ち話をしている座る様子のない二人をよそにすぐ近くのイスに腰かける。コーヒーを飲んでから顔を上げると、既に二人の話は仕事の内容が変わっていて、入り込める雰囲気ではなくなっていた。

することもなくぼーっと二人を眺めていると、松浦さんはずっと口元の横に持っていたカップに口を付けて、そのままゴクゴクと喉を鳴らして一気に飲み干してしまった。ここまで歩いてきたとはいえ、入れてからそれほど時間が経ってない。だから結構あのココアは熱いはずで……。私と同じように相川さんもその様子に驚いた顔をしている。

「松浦さん。それ、コーヒーですよね？ そんな勢いで飲んで大丈夫ですか？」

「ん」

どうとも取れる返事をして、相川さんのいない方にカップを持ち替えた。

「喉が渴かわいてしましてね」

少しむせて、落ち着いてから返事をしたものの、違和感はぬぐえない。相川さんはそれ以上言わなかったけど、私は動揺していた。

もしかして、勝手にココアを勧めちゃったけど、飲みたくなかったとか？ 気を利かせたつもりで松浦さんを困らせていた？ 私の方が気を使われていたんじゃない意味がないこれじゃあ、ありがた迷惑だ。

「それじゃあ、俺はそろそろ仕事に戻ります。くれぐれも七瀬ちゃんに変なことはしないでくださいよ」

相川さんは私の頭を撫でると、ペットボトルをきれいにゴミ箱に投げ入れ、レストコーナーから立ち去っていった。私はぐるぐると巡る後悔で、お疲れさまも言えず、松浦さんにどう話しかけていいのか悩んでいる。

どうして一気飲みだったのか聞いてみたいけど、口を開きかけては言葉にならず、結局は口を閉ざしてしまふ。

「そんな顔をしないでください。七瀬さん」

先に話しかけてくれた松浦さんは苦笑いで、隣に腰かけた。あまり間隔の広くないイ



スは隣同士に座ると、かなり密着してしまう。普段なら警戒する距離も松浦さんのせいか、あまり気にならない。

「言い訳をさせてください」

カラになったカップを両手で包み、松浦さんはふっと息を吐く。

「実は……、あまりココアを飲んでいるのを人に知られたくなかったんです」

松浦さんのカップの底には、ココアが黒く残っている。それを見ながら、続きに耳を傾ける。

「この年ですし、甘党キャラじゃないというか……、ようは恥ずかしいんですけどね。七瀬さんには偶然とはいえ知られていたのが平気だったんですが、まさか相川君がここにいるとは思ってなくて、ついあんな飲み方をしてしまいました」

この年と言うけど、確かまだ三十まではいってない。それに、松浦さんならむしろ甘党もありな気がする。自分のどこを気にするかなんて、人それぞれだから言えたことじゃない。でも、とりあえずは、ココアが嫌だったわけじゃないようで安心した。

ホッとしたところで、松浦さんの方を見ると、いたずらがばれた子供みたいな顔をしていた。

まただ。また、新しい表情を見ちゃった。なんかラッキーかも。って、別に今まで気にしたことなんてなかったのに……

「あーあ、せっかく七瀬さんが入れてくれたのに。もつたいない飲み方をしてしまいました。でも、本当に美味しかったですよ。ありがとうございます」

松浦さんは丁寧に頭を下げて、イスから立ち上がる。

「さあて、コーヒーでも飲んで、仕事モードに戻るとしますか」

立ち上がってから伸びをする、その一連の動作に見とれていたのに気付いてハッとした。

「あのっ！」

「はい？」

「その、たいしたことをしたわけじゃありませんが、どういたしまして」

急いで立ち上がると、慌しく頭を下げた。だって、まさかあんな丁寧なお礼を言われると思っただけだったし、気付けば見とれていたから。それでお礼のお返しを言うのに、変な間が空いてしまった。

恥ずかしくて顔を上げられずにいると、「ぶっ」と吹き出すのが聞こえた。そっと顔を上げると、お腹を押さえて笑っている松浦さんがいる。

「そ、そんなに笑わなくてもいいじゃないですか」

もう、余計に恥ずかしい。笑われるようなことをしたのは私なんだけど……

笑い声がピタリとやんで、松浦さんは抱えたお腹から手を離して姿勢を正す。松浦さんって、背が高いんだ。

見上げた松浦さんの顔はもう笑っていない。一瞬、距離が縮まったと思うと、松浦さんの腕が伸びて、顔の横を抜け、すぐ後ろの壁に手を付く。反対の手が肩に乗せられる。トクン。

一瞬のことに、心臓が跳ねた気がする。私の動揺をよそに、松浦さんの顔が横に来る。そして、すぐ耳元で声が出た。

「ココアの件は内密にお願いします。今度、口止めにご飯をおごりますから。断らないでくださいよ」

離れ際に髪を一房掬い、さらさらと手からこぼしていく。そして「ごちそうさまでした」と、一言残して、先にコーナーから出ていった。

その背中を見ながら、しばらく固まって動けずにいた。

顔が熱い。耳に松浦さんの声が残っている。さっきの何？ あれは誰？ 今日、初めて松浦さんとともに会話をし、いろいろな表情を見て……

でも、最後のあれは全くの別物。

「どうして……？」

ドキドキが収まらない。指先が震える。頭に血が上っている。松浦さんとの会話に少し緊張したものの、穏やかな雰囲気。新しい発見がたくさんあって、少しわかりかかたと思つたのに……

最後の言葉で松浦さんが全然わからなくなつてしまった。

その日から、松浦さんは変わり始めた。と、言うか語弊があるかもしれない。相変わらずスキンシップをしているみたいだし、誰からも嫌がられていない。変わったのは、私への態度だけ。

それまでの関係といえば隣の部署の先輩。だから今までだって挨拶ぐらいしかしたことがなかったわけだし。それなのに……、何を考えているんだろう。

例えば、やたらと目が合うようになった。私が松浦さんを見てしまうからんだけど、目が合うってことは松浦さんも私を見てるってことで、そう考えると落ち着かない気分になる。

すれ違えば、挨拶ついでに話しかけられるようになった。内容は取るに足らないことばかりなんだけど、その時にじつとこちらを見る視線が少し……怖い。

そして、一番付いていけないのが、笑顔で穏やかに話しているはずなのに、さり気ない一言に心を乱されること。体が縛られたように身動きが取れなくなってしまう。松浦さんは私の反応を見て、どこか楽しんでるようにさえ見える。

こちらとしては、その瞬間に頭の中で警鐘が鳴り響いているのに。そんな相手、これまでの経験からしたら避けるだけなのに。それでも、ほんわかとした雰囲気松浦さん

には警戒心がどこかへ行ってしまおう。

今までの松浦さんが白ならば、時折顔を覗かせ、私の心をかき乱すのは黒い松浦さん。いつしか、松浦さんを色で捉えるようになっていた。

それにしてもよくよく観察してみると、本当に『スキンシップ魔王』の異名が伊達じやないのがわかる。ある時は、マウスを操作している女子社員の手の上に自分の手を重ねて操作をして。はたまたある時は、制服の襟が立っていた女子社員の襟を直し。さらには男性社員の歪んだネクタイも整えてあげている。

口で言えば済むことなのに、あえてしていることなのか、無意識なのか、私には判断がつかない。ただ、そういうのを見ていると、白や黒に見える松浦さん自体、私の勘違いな気もしてしまう。

話自体あまりしたことがなかったから、松浦さんのことをよく知っているわけじゃない。ただ、近づかれるたびに、白なのか黒なのかを警戒しないといけないのが落ち着かない。

自分ではどうしようもない状況から逃れるように、松浦さんを避けるようになっていった。とはいえず、隣の部署で、どちらかが立っていれば視界に入る近さでは限界がある。最低限の接触で済むようにしながら、なんとか心の平静を保つぐらいしかできなかった。

お昼休みの真ん中は給湯室が空いているので、その時間を狙って給湯室でコーヒーを入れていた。最近、気の張りすぎで妙に肩が凝る。

慣れた手順で手を動かしながらも、あえて松浦さんのことを頭から追い払って、最近の仕事について考え始める。少し前から、相川さんのヘルプとして携わっている仕事、今までやってきたことは少し勝手が違い、簡単に言えば難しい。お昼前には完全に手詰まりになっていて、どうやって先に進めたらいいのかもわからなくなっている。スケジュールは少しゆとりを持って組んでもらっているものの、自分で決めた予定からは遅れ始めていて焦っていた。

もう少し自分で考えるべきか、相川さんに聞きに行くべきか、今はそのことで悩んでいる。もし簡単なことを見落としていて、聞きに行ってしまったら……。とか、考えるとなかなか相川さんのところには行けない。でも、このまま無為に時間をかけても仕方がないし……

深く考え込みすぎたせいで、すぐ近くまで人が近づいていることに気がつかなかった。

「七瀬さん。こんなところで考えごとですか？」

「ひやつ！」

素っ頓狂な声を出したせいで、カップに手がぶつかり、上に載せていたドリップパックがシンクの上に落ちてしまう。

「ま、松浦さん……。驚かさなくてくださいよ」  
 あたふたとダスターでコーヒーを拭き取りながら、あまり目を合わさずに文句を言った。

「ごめん。そんなに驚くとは思っていなくて。やけどとか平気かな？」

「大丈夫ですけど」

よかった、今は白松浦さんみたいだ。それにしても、こんな近くに来るまで全然気がつかなかったなんて。せめてもう少し手前で声をかけてくれればいいのに、突然背後から声をかけられたら、誰だってこうなっちゃうわよ。

「あまりにも気付いてくれないから、どこまで近づけるか思わず試しちゃいました」  
 すぐ背後でくすりと笑っているのがわかった。少しだけ白さがくすんだ気がする。

もう一つ。松浦さんが変わったことがある。なぜか二人きりだと敬語が少し崩れて、くだけた口調になる。基本的に松浦さんは同期以外には後輩相手でも丁寧に話しているのに。

くだけたといっても丁寧さは抜け切っていない。その辺の使い分けの理由はわからな  
 い。でも、そのくだけた口調で話しかけられるだけでも充分に動揺させられる。

「僕の分もコーヒーをお願いしようかな」

カップを笑顔で差し出されれば、無下には断れない。

「いい……ですけど」

多少の警戒心を残しながら、カップを受け取りコーヒーの準備に取りかかる。会話は  
 なくなっただけで、作業する手元に思いつきり視線を感じる。しばらくすると、聞こえる  
 のはドリップからカップへと雫が落ちる音だけになる。

この息苦しい空気はなんとかできないかしら……っ！ 心なしか……松浦さんの雰囲気  
 が……

「最近、怖がらせすぎたかな？」

ピタリとお湯を注ぐ手が止まる。『怖がらせすぎた』って……それは、つまり、松浦  
 さんがあえてやっていったつてことよね？

「……そんなことは……ない……ですけど」

正直に言えば、怖い。でも、それを本人に面と向かって言うのも怖い。結果、尻すば  
 みな言葉になってしまい、あまり上手にごまかせたとは言えなかった。

「そう？ なら、あの約束も平気だよね？」

ビクツとしてしまう。ずっと、忘れようとしていた話題が出てきてしまった。いっそ  
 のこと、松浦さんが忘れてくれないかと思っていたんだけど。

「あの、別に誰かに言ったりしませんから。……だから口止めとか、そういう心配はし  
 ないでください」

変に意気込んで、強めな口調になったのに、途中から勢いを失う。ちぐはぐな話し方になりながらもなんとか、言いたいことを伝える。松浦さんは口止めに食事をおごってくれるって言ったけど、そもそも誰かに喋ったりするつもりはなかったんだから、その必要はない。

「七瀬さん……」

背中にはの汗かな体温を感じるぐらい松浦さんが近い！ しかも呼びかけられた声がありにも耳の近くだった。その一言だけで、白さが完全になくなり、黒へと変化を遂げた。「僕はあの時、断らないでって言いませんでしたか？」

丁寧な口調なのに、優しさを感じない。やだ、鳥肌まで立ってきた。蛇に睨まれた蛙のごとく、動けない。唾を飲むのも、呼吸さえも難しい。

「あのーですね。……今やっている仕事とか、ちょっと大変でして。いつ頃落ち着くのかとかわからないので、予定が立てられないんですよ」

張り付いたみたいに異常に渴いた喉。必死に声を出して、言い終わってから唾を飲み込んだ。松浦さんが背後からどいてくれる気配はない。

「その仕事、相川君のやつですよ？ 問題ないよ。うちのプロジェクトのやつだから」  
「どの辺が……問題ないんでしょうか？」

松浦さんの意図が掴み切れず、質問をしてみる。

「今週中には一段落するってこと」

「そう……なんですか」

相川さんは確かに松浦さんとのプロジェクトにも関わっているが、並行して別の仕事もやっている。私が頼まれたのが、どこの仕事かまでは説明されていない。

本当なのか、いまいちわからず、気の抜けた返事をしてしまう。でも、他になんと返事をしていいのかもわからない。手が動かせるようになった隙に松浦さんのドリッパックにお湯を注ぎ足す。ドリッパの落ちる雫を眺めながら、必死に断る口実を考える。

耳元で声がしていたから、その辺に顔を近付けているんだろうと想像してはいたけど、突然、松浦さんの顔が真横に並んだ。背の低い私に合わせるために腰を屈めているのかな。

「僕の都合で悪いけど、来週の月曜と金曜しか空いていないんだ。どっちがいい？」

こともなげに問いかけてくるけど、そこには行くか、行かないかの選択肢がない。日取りを決めるだけの質問。

自分の心臓がうるさい。給湯室でこんな状態なのに、会社以外の場所で二人になってしまったらどうなるの？ 今更、行かない、とか言えなさそうだし。

早く返事をしないといけないとわかっていても、そう簡単には答えは出てこない。そのまま固まっていると、松浦さんがずっと離れ、黒さが薄れていく。

「残念だな。時間切れ。返事、今週中に聞かせてもらおうから」

コーヒートの落ちきったカップをそのまま取ると、横にあったゴミ箱にドリップだけ捨てて、するりと出ていってしまった。

完全に姿が見えなくなった瞬間に、しゃがみこみたくなるほどの疲労感を覚えた。

「な、なんだったの？ 強引な話の運びだったのに、最後にはあんなにあっさり引くなんて。」

時間にしたら五分もないのに、あれだけの会話にもすごい緊張してた。

シンクに手をつけて、なんとか座りこまずに深呼吸を繰り返して、心を落ち着かせる。

松浦さんを入れ替わりに女子の先輩が三人入ってきた。その内の一人は松浦さんと同じ部署の人だ。

「七瀬さん。お疲れさま。松浦さんと一緒だったの？」

「はい、たまたま一緒になっただけですけど」

「いーなー。独身の中では落ち着いてるし、うちの男性社員の中では有望株よねー。何か話でもしたの？」

『スキンシップ魔王』としての名は伊達<sup>だて</sup>じゃない。でも、松浦さんのあの黒い部分を見たことがある人はいるのかな？ 私はまだ入社二年目だけど、先輩たちなら。

「大した話はないです。松浦さんって、昔から評判がいいんですか？」

「なにより、七瀬さんも松浦さん狙い？」

「いえ、そういうわけじゃなくて……」

と、否定した側から別の先輩が喋り出す。

「昔からよね、あの物腰。告白した子が何人もいるけど、上手くいった話は聞かないから、社外に恋人がいるって噂があったけど」

そうか、お付き合いしている人がいたっておかしくないんだよね。でも、付き合い相手はあの他者へのスキンシップを許せるものなのかな。

「そうそう、この前。松浦さんに呼び止められて、突然唇を触られたのー！」

普通に考えたら、会社内ではありえない。でも、話している先輩はどこか興奮している。「そしたらー。口紅がはみ出してますよ。だってー！ もう、すごいドキツとしちゃったあ」

……本当にすごいスキンシップぶり。そして、嫌がられていないところが不思議。

「でも、あの仕事ぶりだと。……付き合いには少し寂しいかも」

その後も盛り上がり続ける先輩たちに少し圧倒されながら、話を整頓したけど、特に黒い部分が表に出た感じはなさそう。あの仕事ぶりっていうのは、残業ばかりしているところかな。

「七瀬さんからしたらちよっとおじさんじゃない？」

「あ、いえ。本当にそういうんじゃないで、ちよっと気になっただけなんです。変なこ

と聞いてすいません。お先に失礼します」

このままいけば、抜け出すタイムングがもつと難しくなりそうだし、多少強引だったけど給湯室から脱出した。

昼休みにあんなことがあって、落ち着かない気分だったのに、それに反して仕事の方は一気に進んだ。と、言っても自分で解決したわけじゃない。お昼休み明けすぐに相川さんが来て、進捗確認しんたくと言いながら状況を聞いて、ヒントをくれた。そのお陰かげですると進んだわけだけだ。

「内緒だって言われたけど、松浦さんがお昼休みの終わり頃に来てさ、七瀬ちゃんの様子を見てみるって言うからさ。この内容なら聞きに来てくれてよかったのに」

と、意外なところからの助け舟だったことを知った。

「いえ、午後になってもダメだったら聞きに行こうとは思ってたんですけど……」

「そっか、じゃあこれで先に進められそうかな？」

「はい。わざわざありがとうございます」

「いえいえ。じゃあ、よろしくね」

確かに仕事が大変だと松浦さんには言ったけど、相川さんに聞こうと思っていたことまで、どうしてわかったんだらう。散々、人のこと悩ませておいて、仕事ではちゃんとフォローしてくれるなんて。松浦さんは……何がしたいんだらう。私には全然理解でき

なかった。

ここ最近が残業続きだったせいか、その日は「スケジュールどおりだから今日は帰りなさい」と相川さんに厳命されてしまい、大人しくそれに従うことにした。そのまま、普通に帰るつもりでいたのに、夕方に同期から食事のお誘いメールが届いた。前回は断っているし、今回は参加しておこうかなあ。

入社時に十三人いた同期は今では三人辞めて十人。不定期に行われる同期の食事は仕事の都合とかもあって大体いつも五〜六人が集まる。飲み会ではなく、なぜか美味しいものを食べる方に重点が置かれていて、あまり飲めない私としては助かるところである。

「あ、こっち。こっちー」

毎回、開拓という名目で違うお店。今日は会社から出て、駅とは逆方向のお店でメールに送られてきた地図を頼りに合流した。

「お疲れさまー」

「よかったー。七瀬さん来なかったら、今日は女子一人だったよー」

今日は男子四人の女子が二人。元々、女子は三人しかいないけど。私以外の二人は仲がよくて、この食事会も大体は一緒にいる。今日は予定が合わなくて来れなかったらしい。

自分達の仕事のこととか、愚痴とか、社内の噂話だったり、恋愛話だったり。話に加わりながらも、どこか傍観者のような自分がいつもいる。この食事会もそれほど積極的に参加したいわけじゃない。ただ、二回に一度ぐらい参加しておけば浮かないで済む。そんな打算が働いていた。

「ところで、前々から噂らしいけど、七瀬って相川さんと付き合ってるの？」  
「え？」

何度か聞かれたことはある。大体はからかいや冗談まじりだったけど、同期から言われるのは初めてで、しかもフロアの違う人間から言われたことに驚いてしまった。

「そんなことないけど。前々から噂なの？」

「だって、七瀬ってあんまり人に懐かないのに、相川さんには懐いてるって。うちの部署まで流れてきたぞー」

からかいと好奇心の眼差し。苦みを覚えながらもなにごともないように振舞う。

「よく言われるんだけど、お兄ちゃんみたいなきな感じかな。相川さんは面倒見がいいし、私、仕事がとろいから」

いつもと同じ軽い調子で笑ってみせる。

「うっそー。七瀬さん、それって恋の始まりじゃない？」

男子よりも厳しい突っ込み。それにかなりしつこい。私は、『恋』という単語に更に

ガードを固くする。

「ねえ、それってお酒？ 一口もらってもいい？」

苦し紛れにキレイな紫色のジョッキを指差す。

「いいよ。これグレイプサワーだけど平気？」

「うん。ちょっと飲んでみたいんだ」

ビールや日本酒の匂いがダメで、お酒はずっと飲まずにきた。話題から逃れるために口走ってしまったことだけど、手元のジョッキは甘くていい香りがする。

「あ、美味しい」

一口だけでもらつてすぐに返したけど、今までもっていたお酒の概念が変わった。こういうのだったら飲めるのかもしれない。

その行動が功を奏して、話題はやむやみになった。その後も梅サワーを一口もらい、サワーならいけることがわかった。苦い思いと、新たな発見をし、同期の食事会は無事に終わった。

ぞろぞろと駅に向かい、会社の前を通りすぎたところで思わぬ人と出くわす。

「あれ、七瀬さん？」

「あ、お疲れさまです」

うちの会社は人数が多いから、違うフロアになると顔と名前を覚えるのは難しい。私



の挨拶に同期も倣<sup>なま</sup>って挨拶をする。

「こんな時間まで残業ですか？」

既に二十二時を過ぎてている。私の言葉にほんわかとした笑顔を浮かべるのは白い雰<sup>ふん</sup>囲気の松浦さん。

「大体、こんな時間です。七瀬さんは？」

「あ、今日は同期と一緒にご飯を食べて……」

同期の方に視線を巡らせる、松浦さんの方から自己紹介をした。

「あ、『スキんシツプ魔王』……」

一人の男子がポツリと呟いた。他のみんなも一斉に好奇の眼を向ける。

「他のフロアにまでその名が知れているんですか？」

松浦さんは気にしたふうでもなく笑っている。そのあとに、同期の方も委縮<sup>いじやく</sup>しながら端から所属と名前を名乗っていった。

「呼び止めてくださいね。駅に向かうところですか？」

「あ、はい」

もちろん松浦さんも駅に向かうところだったので、同期プラス松浦さんのメンバーで微妙な空気のまま駅へと歩き始めた。偶然なのか、顔見知りだから必然なのか、私は松浦さんと横並びで歩いている。

「松浦さんって、七瀬さんの隣の部署なんですよね？」

松浦さんに一番興味津々の同期の女子は、すすっと横並びになるとそんなことを問いかけた。

「そうですね」

「さっき聞いたんですけど、相川さんと七瀬さんっていい感じなんですかあ？」

思わず上げそうになった悲鳴を口から出る一歩手前で呑み込んだ。いや、声になる前に突如として寒気に襲われて声を失ったっていうのが近い。

「それは、さっき言ったけど……」

「そんな噂があるんですか？」

気のせい？ 私の勘違い？ よくわかんないけど、いきなり松浦さんが黒くなった。聞き返す声も怖い。

「あるみたいなんです。七瀬さんごまかすから、松浦さんならわかるかと思って」

無邪気に会話を続けているけど、彼女はこの黒く渦巻くものを感じないの？ これ以上、その話題を松浦さんに振らないで……

「確かに仲はいいけど、僕から見ると、兄妹みたいで微笑ましいですよ」

質問をした本人は松浦さんの笑顔に当てられたのか、少し頬を赤らめている。

「七瀬さんが違うと言うなら違うんじゃないですか？」

さらりとそう結んだが、最後にちらりとこちらに向けられた視線がものすごい怖い。「だから、さつきもごまかしてないし、違うよ。本当に」

さつき以上に必死の形相で同期に訴えかける私。「でも、何もなければ噂も立たないよ。それに、あの話の後、普段飲まないのにお酒まで飲んでたし怪しー」

「相川さんは尊敬している先輩で、私はそういうの絶対ないから！」  
 声を荒げてしまう。驚いた顔の彼女を見て、自分の失態を悟った。まずい。こんなふうに自分を晒すつもりなかったのに。

「そう……なの？ そんなに怒らなくても……。ごめん、ごめん」

微妙に気まずい雰囲気になると、彼女は前を行く男子の方へと行ってしまった。こんな時にすぐフォローしあえるほど、彼女とは親密じゃない。後悔と自戒の念に駆られて落ち込んでしまい、つい隣の黒い存在を忘れてしまっていた。

「僕の『スキんシップ魔王』と同じレベルで、七瀬さんと相川君の噂が流れているってことかな？ で、実際のところはどなの？」

落ち込む暇も与えられない。松浦さんは……怒っている？

「本当に違いますから。……私なんかと噂になったら相川さんに失礼です」

「七瀬さんと噂になれるなら喜ぶと思うけど」

前には同期がいる。最後尾を歩く私たちの方を振り向くそぶりはない。一緒にいるはずなのに松浦さんと二人きりみたいな状況が苦しい。

「私となんか……誰だって迷惑です」

「僕はむしろ七瀬さんと噂になりたいけど」

一体、どんな噂を望んでいるのかわからないけど、私としてはご遠慮願いたい。

「松浦さんはもう充分に名が知れているからいいじゃないですか」  
 現に同期だって、知っていたわけだし。

「その不名誉な呼び名を吹き飛ばすぐらいの噂がいいけど……。今、ここでキスしたら彼らが噂を流してくれるかな？」

んなっ！ なっ……何を言い出しているの、この人は？ し、しかも、髪っ！ 髪、触られてるー！

声を上げそうになったけど、ここで同期に振り返られたら、それこそ噂になりかねない。

「七瀬さんはいつもいい匂いがあるよね。香水じゃなくてシャンプーの香りかな？」

髪を持ち上げられる感触に続いて、匂いがかがれている気配がある。怖くて確認ができません。っていうか、なんで今するの？ 同期が一緒にいるのに、外なのに。会社の近くで、もしかしたら後ろから見ている人がいるかもしれないのに。

「や、やめてください」

聞き入れられないと思っていたのに、最後にチュッと、軽い音がしてから解放される。「今日は髪にキスでやめておきます」

いや、それ以上はないですから。本当……

「ところで気になったことがあるんですけど、この同期の食事というのはいつ決まったんですか？」

髪にキスをされて動揺している私をよそに、黒いままの松浦さんは変なことを聞いてきた。

「いつっていうか……、連絡があつたのは今日なので」

「ふうん」

なにか含みのある返事。なんで同期の食事になんか気になるんだろう。

「僕の食事の誘いはなかなか返事がもらえないのに。今日いきなりの誘いは平気なんですわね」

「あ、いや、えーっと……」

忘れようと思っていたことを思い出した。

「月曜と金曜どっちがいい？」

しどろもどろになったところに間髪を入れず、笑顔で聞かれてしまった。この状況じや言い逃れもできない。忘れようとしていたぐらいだし、考えていたのは行かないで済

む方法だったから、どっちかを選ぶつもりはなかった。

「考えてくれてなかったのかな。まさか、そんなことないよね？」

そんなことありました。でも、「あるとは言わせないぞ」って雰囲気黒い松浦さんを前に正直に白状できるわけもなく、どう答えるか頭をフル回転させる。

「そうだな、今度の土日っていう選択肢を増やしてもいいけど」

私の動揺をわかって言っているのか、どこか楽しげな口調の松浦さん。私が返事しない間にもどんどん追い込まれている気がする。しかも土日とかありえない選択肢が増えた。この駅までの道のりでさえ困っているのに、一日中一緒にいるのは無理。

「月曜！ 月曜日でいいです」

追い詰められて、とっさに出てきた曜日を答えてしまった。もう、食事を断れる状況じゃないし、この際、土日じゃないならいつでもいい。

「土日によつくり、たっぷり話をするのもよかったのに残念。じゃあ、月曜日に。ちゃんとおごるからそのつもりでいてね」

「はい……」

本当に行くことになっちゃった。

「そうだ、ケータイ。番号とアドレス、交換しておきましょう」

「は、はい」

慌てて自分のケータイを取りだす。

「赤外線しますから」

言われるままに操作して、私のケータイに『松浦雄之介』の名前が登録される。

「それでは、月曜日。楽しみにしていますよ」

気がつけば、駅に着いていた。すっかり白モードに戻った松浦さんは改札前で固まっている私より先に帰っていった。

「すげー、生の『スキンシップ魔王』かあ。なんか、もっとフェロモン撒き散らしてるのかと思ったけど、そうでもないんだな」

気付かれていなかったことにほっとしつつも、一人だけぐったりと疲れてしまっていることに理不尽さを感じる。

「さっきはゴメン。七瀬さんってもしかして、松浦さん狙いー?」

「ち、違う。それはない。ない。……本当に」

「えー、松浦さんの笑顔、すっごいよかったけどお」

気まずいままだと思っていたが、彼女は懲りずに違うネタを用意していた。さつきみたいにならないように笑いながら、なんとか無事に同期と別れた。

一人になると緊張から解放され、全身の力が抜ける。それと同時に深いため息が漏れた。

「うー、約束……しちゃった」

「七瀬ちゃん」

「あ、はい」

月曜日、お昼が終わって席に戻ったところで、相川さんに呼び止められた。

「今回、やつてもらった仕事あるでしょ。今日の午前中、その会議があって、次の段階から七瀬ちゃんもヘルプじゃなくて、正式にアサインされることになったから」

「そうなんですか?」

想像もしていなかった話に、改めて相川さんを見返したけど、嘘を言っている様子ではない。

「七瀬ちゃんの仕事、少し時間はかかったけど、出来上がりが丁寧だったし。そろそろ新しい仕事を覚えてもらうのいい機会じゃないかって」

「ありがとうございます!」

今回の企画は初めてで不安なこともあったりしたけど、自分のやった仕事が認められて、じわじわと喜びが込み上げてくる。

「ちょっと早いんじゃないかって、意見もあったんだけど。仕事ぶりを見ていたうちの課長と、松浦さんの口添えがあってね。それで決まったんだ」

松浦さんの……。ふいに出てきた名前に盛り上がった気持ちが一気に沈む。公私混同

するような人ではないと思うけど、ここ最近の関わりを考えると素直に喜べない。

そのプロジェクトの方は、明日からの松浦さんの出張が終わってからになるらしく、今週は他の人のヘルプと新人研修をすることになっている。

今日は相川さんの二期先輩になる樋口ひぐちさんのヘルプに入るため、早速仕事を聞きにいった。

「七瀬さんにはこれを傾向別に分けて集計してもらいたいんだ」

「はい、いつまでですか？」

「そうだな。明日の午前中ぐらいいまで。できる？」

渡された資料を見る限り、結構厳しい量に見える。がんばらばいけそうな、ギリギリの期限を提示されている。

樋口さんは眼鏡をかけているせいか、少し神経質な雰囲気がある。あまり一緒に仕事をするのではないけど、よく一緒になる社員さんはタイトなスケジュールばかりだと文句を言っていた。

「わかりました。できるだけ間に合うようにします」

そう答えると、樋口さんが眼鏡越しにじっと見てくる。頭の上から足の先までを……言い方は悪いけど舐め回すように視線を巡らせる。そして、肩に手を乗せると腕の方まで撫で下ろしてから資料を渡された。

仕事上での文句はあまりない。でも、樋口さんの視線と撫でるような触り方だけは受け付けられない。ことを荒立てるつもりはないからやり過ぎけど、できることならやめて欲しい。

席に戻って資料に目を通すとついいため息が漏れる。明日の午前中にあげるには、今日は少し残業した方がよさそうだ。でも……約束。いや、仕事の方が優先だね。

松浦さんに、一時間だけ約束をずらしてもらうようにメールをいれてから、午後は集計作業に集中した。気持ち落ち着かない時に、忙しい仕事が入って助かった。余計なことを考えずに集中できるから。

終業のチャイムが鳴ってから、チラリと隣の部署を見れば、松浦さんも残業をしている。普段から残業が多い分、逆に最初の約束どおり定時で席を立つほうが目立っていたのかもしれない。

一時間の残業で間に合うか心配だったけど、なんとか形になりそうで、区切りのいいところで終わりにしてパソコンの電源を落とした。立ち上がると、既に松浦さんは席にいない。なくなっている。

更衣室で着替えをしていると、ケータイに松浦さんからの連絡が来た。

「一緒に出る？ 駅で待ち合わせする？」

松浦さんからの初めてのメール。なんだか変な感じがする。文面からするとまだ社内

のどこかにいるみたいだけど、一緒に出るって、それはないでしょう。口止めとしての食事だけど、下手に二人きりで見られるところを見られたら松浦さん狙いの女性陣から何を言われるか、わかったものじゃない。

駅での待ち合わせで、と返信してからロッカーのドアを閉める。

「一緒ってありえない」

思わずボソッと漏らしてしまふ。松浦さんだって私が断るのわかっていて、わざと聞いてきてるよね。最後にため息をついて、重い足取りで駅へと向かった。

駅は帰宅する人で賑わっている。改札付近を注意深く見渡してみたけど松浦さんの姿は見つけられない。さっきのメールのタイムイングからしたら先に来ているものだと思うんだけど、どこかに寄ってるのかしら？

邪魔にならないように、改札の端にある柵に寄りかかり、駅に来る人を眺めた。

「はあ」

意識せずに漏れるのは、今日何度目かわからないため息。

「そんなに僕とのデートは嫌？」

「っ！」

聞こえるはずのない方向からの声に音にならない悲鳴を上げて、慌てて振り返ると改札を通った中の柵ごしに松浦さんが立っている。

「……あのですね。毎度、驚かすような声のかけ方はやめてもらえないでしょうか」

松浦さんは、黒とも白ともつかない雰囲気をしている。まあ、その判定基準も今となつてはあてにならない。松浦さんに対して私が警戒している以上はグレーなわけだし。

「まあまあ、早く七瀬さんもこちらに来てください」

いきなり背後から声をかけられるのは本当に心臓に悪いのに、反省をしてくれる様子はない。仕方なく言われたとおりに改札を通ると、いつもとは違うホームの方へと歩いていく。こつちだと松浦さんの家の方で食事するのかな？

松浦さんが住んでいるのもこつち方面ということだけしか知らないし、今日行く場所も聞いてない。でも、会社の近くとかで他の人に見られるよりはいいかな。

この時間帯が混んでいるのは知っているけど、普段使わないこつちのホームは更に混んでいた。奥行きがないホームなので、気をつけてないとすぐに線路側に押し出されてしまふ。

「七瀬さん。ちょっと失礼しますよ」

「はい？」

なんの断りなのかわからずに松浦さんを見上げようとした矢先に、体が動いた。じゃなくて、動かされた。

「ちよ、ちよっと、松浦さん」

こ、これは、その……。肩に腕が回っていて、びっくりするぐらい体が密着している。混んでいるので、元々の距離が近かったんだけど、それでもこの距離は普通の会社の先輩と後輩の距離じゃない。まず、先輩と後輩は肩を組んだりしない。

「電車が来る前に線路にでも落ちられたら困りますから」

「……ひどい冗談ですわね」

確かに落ちそうとか思ったけど、思うのと実際にそうなるのには大きな隔たりがあって、そんな心配をされてしまう私って？ 文句の一つでも言うつもりで見上げると、近づいた距離のせいでほぼ真上を見る角度になる。

身長差がある。それなのに……近い。やだ、なんか顔が熱い。

文句を言うつもりだったのに、顔を見られたくなくてすぐに下を向いてしまう。タイミングよく電車がホームへと滑り込んできた。そのまま電車に乗り込むと、松浦さんの手は肩から腰へと移動する。

あとに乗り込む人からかばうためか、ぐいっと体を引かれると胸に抱かれるような格好になってしまう。こんなふうに誰かと近くなるのなんて久しぶりなのに、その相手が……松浦さんだなんて。

緊張するなって言う方が無理で、ガチガチに強張ってしまふ。その緊張を気付かれたくなくて、少しでも離れようとするのに、松浦さんの腕とラッシュ時の車内の人の多さが……

「急に話した内容の意図が掴めず、周りに邪魔にならない動きでそっと松浦さんを見上げる。」

「でも、十分に背は高いですよ。一八〇ぐらいはありますよね？」

「おしいっ、一七八。あと二センチあれば、一八〇です」

二センチ……

「贅沢な悩みですね。私からしたら一七八も一八〇も大差なく、巨人ですよ」

「だから、たかが二センチでも、これ以上七瀬さんとの身長差があるのは困るので、そういう意味での満足なんです。このぐらいの身長差、いいと思いませんか？」

「思いません」

まあ百歩譲って、松浦さんが彼氏だと仮定しても、まだまだ差がありすぎる。できることならもう少し低い方がいい。それにしても、発言の意図が全くわからない。しかもこの過剰なスキンシップ状態。

人と距離を置くのには慣れてたはずなのに、それが松浦さんにはとことんかき乱されてる。

「それより、どこへ行かれるんですか？」

「僕のうち」

「……次の駅で降ります」

「わ、嘘。嘘だよ。つい、どんな反応するか見てみたくなっちゃって。本当は家の近くのお店」

楽しかったでしょうよ。そりゃ、もう。とつても情けない顔になりましたよ。

「なんか、松浦さんってキャラが違いますか？ 最近、変ですよ」

非難めいた口調になっちゃうけど、気にしてられない。それ以上に松浦さんの冗談の方がひどかったし。

「キャラかあ。こっちの方が地だけど。会社では多少の猫だつてかぶるし、七瀬さんもそうじゃない？」

ドキッとした。少し、底冷えがするような……。見られたくないところを見破られた後ろめたさ。会社で本心を出すようなことはしていない。そういう意味で私の場合多少の猫では済まない。

「ほら、乗り換えるから」

気まずさに言葉も返せず、黙り込んでいたら電車のスピードが落ち始めた。中途半端なままの会話は電車から降りて中断された。

腰元に添えられた手に促されて降りると、再び松浦さんの手は腰から肩へと移動する。どうやら離してもらえないらしい。歩きづらけれど、乗り換える人の多さに離れることは諦めた。

そこから数駅先の、名前しか聞いたことのない駅が松浦さんの住んでいるところだった。過剰にスキンスリップしようとする松浦さんをなんとかかわし、二十分ほど歩いて、たどり着いたのは小料理屋。

暖簾のれんをくぐり中に入ると、カウンター席と四人掛けテーブルが三つ、というこじんまりとしたお店だった。

「こんばんは」

カウンターの奥からひよこりと頭が飛び出す。和服に割烹着姿かつぽうの女性だった。

「あら、雄ちゃんじゃない。いらつしやい。あら、あらら！ 女の子連れてきたの？ やだー、デートするならこんなおばさんのお店じゃ冴えないわよ。イタリアンとかフレンチとか、おしゃれなところに連れて行ってあげなきゃー。そのぐらい稼いでるんでしょ」  
挨拶と同時に一気に喋り続ける。圧倒されていると、松浦さんに一番奥のテーブルへと促された。いつものことなのか、松浦さんが女性に驚いている様子はない。

「女将さん。自分のお店をそんなふうにつつちゃダメでしょ。客の立場がなくなります。一押しのもりで連れてきたんですから」



会話をしながら荷物を置いて座る松浦さんに合わせて、女将おかみさんらしい女性に会釈をしてイスに腰を落ち着けた。

「あら。嬉しいこと言ってくれちゃってー。もうっ」

スーツを脱いだ松浦さんが正面に座り、真っ直ぐに見つめてくる。ここ最近、考えていることがある。松浦さんは、どうしたいんだろう。なんで、私なんかを構うんだろう。会社には私よりも大人っぽくて、きれいで、性格のいい人がいくらでもいる。今まで、まともな接点もなかったのに、こうして二人きりでご飯を食べるまでの関係になっっている。

そもそも、関係といっても松浦さんと私は、先輩と後輩でしかないはずなのに。

「七瀬さんは何飲む？」

「私はウー……えっと、甘めのチューハイで」

いつもと同じウーロン茶にしようと思っただけで留まった。同期との飲み会で飲めることはわかったし、松浦さんと渡り合うのにお酒の力を借りたい。

「この前、普段はあまり飲まないって聞いた気がするけど大丈夫？」

「大丈夫です。飲めましたから」

同期の食事会の帰りのことだと思っただけで、そんなことまで覚えていて感心してしまう。「女将さん、ビールと何か甘いチューハイをお願いします」

「はいよー」

気持ちのいい女将さんの返事を聞いてから、松浦さんの視線はすぐに戻ってくる。

「七瀬さんが酔っ払ったら、責任持って送りますから安心してください」

「送るって、松浦さんの家はここからすぐなんですよ？ それに私は酔っ払ったりしませんから」

「酔ったとしても、七瀬さんは可愛いんでしょうね」

「私は酔わないって言っているのに……」

「可愛いとか意味がわかりません」

「はい、お待たせ！ お嬢さん、狭っ苦しいところだけど、ゆっくりして行ってね」

ビール、チューハイ、お通しをテーブルに置くと、女将さんはウイंकをしてからカウンターに戻っていった。なんだか、親しみやすいというか、落ち着く雰囲気だな。でも、あまり楽しめる状況じゃない。

「さて、乾杯しましょう」

「……乾杯」

控えめにジョッキを持ち上げると松浦さんがこちらへ手を伸ばし、ジョッキ同士が小さく音を立てた。

新しいプロジェクトの話から始まり、黒い雰囲気もなく、私の方の警戒心も薄れていた。こうしてゆつくりと一対一で話すのは初めてだけど、松浦さんは聞き上手で、更には話し上手なことがわかってきた。仕事の話でも柔らかい雰囲気のまま、たまに冗談を交えたりする。仕事に定評があるのも、後輩から尊敬されているのも納得ができる。それに料理を運びながら一言、二言会話をしてくる女将さんの存在も緊張をほぐすのに一役買っている。女将さんとのやりとりからするに、松浦さんはここに夕飯がてら一人で来ているらしい。

料理はどれも味がしつかりとしていて、独身男性でなくても家の近くにあれば重宝してしまっただろう。

最初の憂鬱な気分はどこへやら。美味しい料理、ほぐれた緊張、弾む会話。ふと、気付くと新しいチューハイがテーブルに置かれている。

いつの間に頼んだのか、それにこれは何杯目？ でも……、楽しいし細かいことはいかな。笑顔で新しいチューハイを飲む。

「松浦さん。思っていたことがあります」

「なんででしょう？」

「人のことをからかって楽しんでませんか？ 反応を見て面白がるなんてどうかと思う

んですよ」

どこからこんな話題になったのかは……思い出せない。でも、こんな機会でもない日本人に文句が言えない。なんとなくだけど……、酔ってるのかな。

「聞いてます？」

真面目に文句を言っているのに、にこやかで余裕な松浦さん。

「聞いてますよ」

再びチューハイで喉を潤す。

「どうなんですか？ その辺は」

私、絡んでる？ いやいや、これは聞いただけなのであって、絡み酒とかそういうのとは絶対に違うんだから。

「七瀬さんの反応が可愛らしいから。それに、うるたえる姿とかつい見たくなくなっちゃうんだけど、ダメかな？」

「ダメです！ 松浦さんのせいで、私おかしいんですから」

「どうして？」

「なんか……、落ち着かないっていうか……。今みたいな松浦さんなら平気なんですよ。それなのに……」

これ、本人に言っておいて、私の自意識過剰だったらどうするの？ でも、なんか止

まらない。

「それってドキドキじゃないの？」

あれ、私が問い詰めてるはずなのに、私の方が追い詰められてる？

「ドキドキ……することもあります」

問われるまま、素直に答えていると、頭の奥で警鐘が鳴り始める。

「正直だね。それって、僕にドキドキするんでしょ。つまりは好きってことだね」

何度か細かな瞬きを繰り返す。……わ、私が？ 松浦さんを？

「そ、そうやってですね！ す、す、好き……とか、人を振り回すようなことを言わないで欲しいです。誠意を持ってください」

勢いよくテーブルを叩いたつもりだが、あまり力が入らず少し間拔けな音がする。

「誠意かー、持っているつもりだけど、伝わらないかな？」

その口調が、軽い感じが、誠意がないって思わせる原因なのに。

「もう、そういう態度だから信じられないですよ」

「面白そうな話してるわね。大丈夫よ、こんな態度しても雄ちゃんは真面目だし、誠意があるのは保証するわよ。なんといつてもここへ女の子を連れてくるのだったって初めてなんだから。今日は照れ隠しでこんな態度なのよ。許してあげて」

白熱する私を冷ますように、女将さんが松浦さんのフォローをしながら、空いたお皿

を片付けてゆく。

「ほらね。女将さんもこう言ってるし」

私が勢いを失ったところで、松浦さんは女将さんに便乗する。

「松浦さん……。こういう時はちよつと謙遜けんそんしてみせるとか。女将さんが嘘を言うとは思いませんけど、なんか信じられません」

「謙遜？ 褒め言葉はありがたく受け取る主義だけど」

しれつと言つてのける松浦さんの頭を女将さんが突つついた。

「こーら。もう、あんまり変なことばつかり言つて、お嬢さんを困らせるもんじやないわよ」

松浦さんが大人しくなると、重ねたお皿を持って女将さんはさがる。

いつからここへ通っているのかはわからないけど、『雄ちゃん』と呼ばれるほど親しいところを見れば付き合いは長そう。そのお店に女性……。彼女みたいな人を連れてきてないのは……。なんでだろう。そして、私を連れてきたのはなんでだろう。照れ隠しの態度。松浦さんが照れる要素はないはずなのに……

ダメだ。なんか、考えが上手くまとまらないし、それに……

「松浦さん。困りました」

「どうしたの？」

「なんか……、私、眠いかもしれないです」  
 食事中にこんな眠気に襲われたことはないのに。飛びそうになる意識をなんとか保ち、バッグから出したのはお財布と免許証。お財布から一万円を取り出し、松浦さんの方に差し出す。

「タクシー、住所はここに……。呼んでもらえれば、あとはがんばりますから……」  
 自分でもちゃんと喋しゃべれている自信はないけど、行き先がわかっていてお金さえあればとりあえずなんとかなる……はず。

「無茶言ってくれるね。……女将おかみさん。お会計お願いします」

「はい」

伝えたい内容を告げたせいか、一気に眠気の波が押し寄せる。

「す……すみません」

最後に謝罪の言葉。これでもう……。テーブルにベタリと頭をつけるとすぐに眠りの中へと落ちていった。

夢見心地の中、ふと浮かぶフレーズ。

『ドキドキするんですよ。つまりは好きってことだね』

それは違う。

「私は誰かを好きになつたりしないのに……」

んー、なんか寒い……。パタパタと手を動かすと、タオルケットらしい感触がしたので手練り寄せる。

「ふかふかぁー」

肌触りがいい。うちのタオルケットってこんな気持ちいい素材だったっけー？ そのまま、体を転がしてタオルケットに身を包む。

「ん？」

何かにぶつかったので、手を伸ばしてみる。

「あ、これも温かい」

タオルケットとも布団とも違うそれを引き寄せようとすると、それは自ら動き出す。ベッドが揺れてからピタリとくっついてきたので、暖を求めてそれにギュッと抱きつく。

あれー、うちって抱き枕なんかあったっけー？

「可愛いことをしてくれるんですね？」

抱き枕が喋った。……そんなことある？ それに、なんか聞き覚えのある男の人の声だった気がする。

……ん？

拭ぬぐいきれない違和感にパチッと目を開けると、薄暗い空間の中にいた。まだ、夜みた

い。じーっと暗い中で目を開けて慣らししていくと、徐々に周囲が見えてくるようになる。すぐ側にあるシルエツト。これ……人っぼい。正面なんて、顔みたいだし……

「っ!!」

んなっ!　なんで、松浦さん?

驚きすぎて声も出ない。とりあえず起きないと!

「わっ!」

起きようとした瞬間に、すっと伸びてきた手が体を捕らえて動きを封じてきた。一気に頭が覚醒する。私……松浦さんと抱き合って寝てる?　抱きつかれてっという方が正解かも。

目が慣れてくると松浦さんの表情まで見えてくる。さつきから喋らずにじーっとしていると思ったらにこにこしてるし。

「なんで?　なんで、松浦さんが?」

動揺は収まらないけど、ようやく意味ある言葉を口にできてほっとする。

「僕のうちだからです」

「なんで?　松浦さんの家に?　それよりも、なんで抱きついているんですか?　とりあえず離れてください」

腕ごと抱きしめられて、押し返そうにも手が出ない。松浦さんを睨みつけると、唇を

尖らして子供みたいな顔をしている。

「ひどいなあ。先にそっちの方から抱きついてきたのに」

「そんなことしてませんっ!」

断言した直後、松浦さんの目が猫のように暗闇の中で光ったように見えた。

「へー、そういうこと言いますか。さすがに一緒にベッドは悪いと思って、僕はさつきまでソファで寝ていたんですよ」

「じゃあ、なぜ今はソファにいないんですか?」

振り返れないからソファがどこにあるかはわからないけど、ここがソファじゃないのだけはわかる。

「何か言っているのが聞こえてきたから、具合でも悪いのかと思って様子を見に来たんです。そしたら、寝てたからホツとしたんですけど。そのまま可愛い寝顔を見てたら急に寄ってきて、最後には手が伸びてきたので……」

さつきは断言したけど、話を聞いているうちに起きる少し前の記憶が徐々に戻ってくる。言われる内容に心当たりが……

「しまいにはひよりちゃんの方から抱きついてきたんです」

抱き枕だと思ってたのは、全部松浦さんだったんだ。ならば、抱きついたのは私の方からっというのも本当だ。

言葉を失っていると、松浦さんの腕の力が緩む。温もりが離れたのがわかると、すぐに起き上がった。布団の上で抱き合ったまま寝てるなんて……

「なっ！ やあー」

起き上がって自分を見て、更に驚きに声を上げてしまった。すぐに側にあつたタオルケットを引き寄せて体を隠す。だって、上はブラジャーにキャミソール。下はなぜかシヨーツだけ。身に付けていたのはこの三点のみ。

「……なんで？ なんで、私はこんな格好をしているんですかあ？」

「ひよりちゃん。まだ、夜中だから声はもう少し抑えてね」

穏やかな声で諭されて、松浦さんの人さし指が私の唇に触れる。

「ちよっと、何か飲んで落ち着こうか」

ベッドから降りると、光量が抑えられた間接照明が灯される。クローゼットを開ける音が聞こえて、戻ってくる時には手に何かを持っていた。

「これ、大きいと思うけど、着替えたら出ておいで」

優しい声で言われると、少し騒ぎすぎた自覚が芽生える。着替えを受け取って頷くと、松浦さんは微笑んで、部屋を出て引き戸を閉めてくれた。

起きたら松浦さんの部屋だし、あれもない格好だし、ものすごい驚きの連続……。最初こそ問題はあつたけど、松浦さんの態度は紳士的。

わざわざ着替えを寄越したぐらいだから、ないとは思うけど。薄暗い中、自分の服がないかを探してみたけど見当たらない。貸してくれたものをベッドに広げるとジャージだった。それもかなり大きい。

着替えてみると、だぼだぼで裾も袖もかなり余る。折り返して手足を出してみても、ようやくなんとかならなかった。

引き戸を少しだけ開けて、そっと覗いてみる。隣はリビングになつている。

「着替えられた？ もし、大丈夫ならこっちへおいで」

こくりと頷いてから、リビングへと移動した。そこにはさつき松浦さんが言っていたソファがある。

「ジャージお借りして、すいません」

「いえいえ。当たり前だけど、やっぱり大きいね。座って」

促されてソファに座るとテーブルには湯気の上るマグが置かれていた。

「ホットイオン飲料だから、それ飲んで」

初めて見る、温められたイオン飲料。部屋の中はクーラーが効いているのか、少し冷えている。そんな時の温かい飲み物がありがたい。

お言葉に甘えさせてもらい、マグを持ち熱くないかを確かめる。ちよつと飲みやすそうな温度。一口含む。じんわりと体に広がっていく感覚にほつと一息ついた。

半分ぐらいを飲んで、マグをテーブルに置いてから松浦さんの方を見る。私が飲んで  
いる間は喋らず、こつちを見ていた。

「あのー。……なんで私はここにいるんでしょうか？」

「どの辺まで覚えてる？」

天井を見ながら、記憶を辿る。

「……会話が弾んで、もしかして酔ってるのかもって思ったところは」

「酔った自覚はあり、と……。僕に絡んだことは？」

「そんなことしてました？」

新しいプロジェクトから始まり、それ以外の話も盛り上がった。その後のことかな。

「おもしろいね。絡む前までは、話の一つ一つに笑顔で返事をしてくれて、すごくいい  
感じでしたよ」

「いや……。その……。そのあたりもあまり……。記憶が……」

「となると、随分早い段階からだね」

嘘でしたって、オチを微かに期待していたけど、どうやら本当にあったことみたい。  
自分がどんな状態でどんな会話をしたのか、知りたいけど、知りたくない。

「最後には寝ちゃったから、家も近いし連れてきちゃった」

まるで拾いものをしたぐらいの口調にがつくりと肩を落とす。

「そんなの……。タクシーでも拾って乗せてくれればよかったです」

面倒を見てもらったうえに、ここで寝ていたってことは運んでもらったわけで、文句  
を言えた立場じゃないのは重々に承知している。それでもこの状況を素直には受け入れ  
られない。

「すごいね。覚えてなくても、言うことは同じだ」

「？」

感心しているみたいだけど、記憶にない私は何を言ったんだろう。

「タクシー代って言ってお金出して、住所はこことって免許証を出して、それから寝ちゃ  
ったんだよ」

「それじゃあ、なんでわざわざ？」

「ここへ連れて帰ることなんてなかったのに！」

「あんな状態の女性を言われたとおりに、はいそうですかって、できるわけがない。タ  
クシーで寝てて起きなかったら？ タクシーの運転手に変な気を起こさない保証は？」

私の強い口調を上回る厳しい声が返ってくる。真剣な表情に怯んでしまう。

「何か起きたら困るんです」

そのままの調子で続く言葉に、心臓が跳ねた。

「……その心配はありがたいです。でも、その……。付き合ってもいないのに、一人暮ら

しの男性の部屋に泊めてもらうのもどうかと思うんです。ベッドまで使わせてもらって申し訳ないと思いますけど。……ふ、服とかなくなってるし」

控えめながらも、最後まで言い切ると、なぜか松浦さんの表情が緩む。それに合わせ、肩の力が抜ける。

「服はあそこ。皺しわになったら困るって布団に入る前にひよりちゃんが騒いだんだけど、覚えてないよね？ まあ、脱がせたのは僕だけだ」

リビングの壁際のハンガーには私の服がかかっている。その下にはバッグもちゃんと置いてある。松浦さんは淡々と言ってくれたけど。酔って皺しわがどうか騒いで、その上脱がされたの？ ものすごく恥ずかしいんですけど。

「暑いって言うんで、クーラーかけておいたんだけど、少し温度設定を低くしすぎたのかな。あの格好じゃ寒かったんだね」

更にさっきまでの格好について言われるともう……顔も上げられません。

「……すいません」

ちゃんと謝らないといけないのはわかっているけど、今は恥ずかしすぎる。もじもじと指をいじりながら、どうこの恥ずかしさから抜け出せるのかを考える。

「今って誰かと付き合ってたたり、好きな人はいたりする？」

「はい？」

いきなりの話題に思わず顔を上げる。松浦さんは読めない表情してる。

「それって、今、関係あるんですか？」

しばしの間。目と目が合ったまま、時間が止まったのかと錯覚しそうなくらい。

「僕にとっては、すごく意味がある」

異性に対してこの質問をする意味といえは……、でも私の想像でしかない。目が合ったままの松浦さんは私の反応を見ようとしている。

とても大事なことを言われている気がする。松浦さんの視線が私の動きを封じている。クーラーとは別の寒さがある。空気すら重く感じてしまう。

「今日、ここへ連れてきた一番の理由はもつと一緒にいたかったから。帰したくなかったから」

指先は冷たいのに、心拍数を上げる心臓を中心に体の奥が熱い。今までにないくらいの真剣な声。

「強引に食事に誘ったのは二人きりになりたかったからなんだ。僕だけを見て欲しく……まあ、絡まれたのは予想外だったけどね」

くすりと笑うのに、真剣さは揺るがない。そして、松浦さんの手が伸びてくる。斜め向かいに座っている松浦さんから私の座るところへはすぐに手が届いてしまう。

ダメ。触れられたら……。怖い……。でも、体が動かない。必死に下がろうと思つて、



ソファの背もたれに背中がぶつかつたところで、手の上に松浦さんの手が重ねられた。冷たいはずの手が触れたところからじわじわと熱くなる。見透かすような視線に心の中を覗かれるような恐怖。できることなら、今すぐ、この場から消えてしまいたい。

顔を逸らすことも、目を閉じることも叶わない。

「言霊ことたまってわかる？」

また話が急に飛んだ。言霊ことたまって……なんとなくはわかるけど。口で説明は無理かな。カラカラになつた喉は喋れそうになく、曖昧に首を傾げる。

「言葉に宿る魂。気持ちを込めた言葉は力を持つんだ」

捉えていたイメージと大体は同じような意味で少しほっとする。

「僕は今までに何度かひよりちゃんに言霊を送っているんだ。受け取っているよね？」  
目を瞠まはただけなのに、松浦さんは満足そうに頷く。だって、心当たりならある。黒い松浦さんだ。会話の内容とは別に、私を惑わす声。

じゃあ、松浦さんが言葉に込めていた気持ちは？ 私を惑わしてきたものは？

重ねられた手はもう冷たくない。この熱さは私の？ それとも松浦さんの？ 考えてもわからない。今日は移動する間に松浦さんから過剰にスキンシップされた。あんなに密着してたのに、手と手で触れ合うのは今が初めて。

熱い。熱いよ。

じつと重なっている手を見てみると、ポタリ、ポタリと涙が落ちる。

ソファから降りた松浦さんは私の足元にしゃがみ、下から覗き込んでくる。空いている手が顔に近づいてきた。頬に手の平が触れた瞬間に微かに震えた。

頬をピタリと手が覆う。指先が涙をそっと拭う。いつもは見上げる顔が下から心配そうに私を見ている。涙の理由は私にもわからない。でも、そんなに心配しないで。

言葉にはせず、心で思っていると、重ねられた手と頬に添えられている手がゆつくりと、名残惜しそうに離れてゆく。

安堵と一抹の寂しさ。そう思つたのも束の間。次の瞬間には松浦さんに抱きしめられていた。きつく、苦しいぐらい力強く。

「僕はひよりちゃんが好きだ」

耳から入った言葉は、松浦さんの気持ちごと体中を駆け巡り、最後には心に響いた。心臓が早鐘のように鳴り響く。

信じられないことだけど、松浦さんの言葉も気持ちも全てが「好き」だと伝えてくる。だらりと下がったままの手が松浦さんの背中に伸びそうになり……、元の位置に戻る。

好きの気持ちには理屈がなくて、応えてしまえば幸せが待っている気がする。でも、幸せの先には……拭いきれない恐怖。何重にも鍵をかけて心の奥底にしまつてあつた箱が無理矢理こじ開けられそうになっている。

「すぐには……返事ができません」

答えるまでに時間はかかったけど、松浦さんはそつと離れて、元の場所に座りなおした。「今は……受け取った言葉も……気持ちも……処理できません」

「そう簡単に返事をしてもらえとは思ってなかったし。全く期待していなかったって、言えば嘘になるけど。でも、ちゃんと考えて欲しいから返事は急がないよ」

私がまた恋愛をできるようにするか、今はまだわからない。でも、跳ねる鼓動を確かに感じた。

「今まで僕の態度で困らせたりしてごめんね。ふざけてたわけじゃないのだけわかってもらえる嬉しいけど」

散々、振り回されたけど、どこか憎めない。ゆっくり頷いて返す。

「さーて、僕の意思は伝えたわけだし。返事は待つけど、早く好きだって言ってもらえるように行動はさせてもらうよ」

穏やかな笑顔が、気付けばいたずらを思いついたような笑顔に。見えたのは一瞬ですが、表情がわからないくらい近づきすぎたせいで。

「っ!!」

自分の唇を押さえて、バタバタと騒がしくソファから立ち上がったから松浦さんの方

を見る。こっちは完全に動揺して、顔まで赤くなっているっていうのに、飄々とした態度で悠然としている。

「これからよろしくね。ひよりちゃん」

キ、キスしたぁー!!!

話し込んでいたせいで時間の流れが全然わからなくなっていたけど、カーテンの合い間からは朝の陽射しが差し込んできている。

松浦さんはここから会社に行けば、と軽く勧めてきたけど、いくら制服があるとはいえ、同じ服装で行けるわけがない。

「着替えしないとイケないし、お風呂も入りたいんです」

「そのジャージ姿も可愛いよ。お風呂、うちの使えば。同じシャンプーの香りついでいいよね」

探り合いの必要性がなくなってしまったせいか、松浦さんの言葉に遠慮がない。もちろん丁寧に断りして始発で自分の家へと帰らせてもらった。

今日から木曜日まで松浦さんは出張へ行ってしまう。だから、会社で顔を合わすことはない。

でも、睡眠不足と、松浦さんから告げられた気持ちのおかげで、うっかりと小さなミスを連発。どれも大事には発展しなかったものの、不調なのは明らかだった。

松浦さんのいない三日間は、落ち着くまでのインターバルになるから助かる。動揺も初日だけで済んだし、なによりも顔を合わせるのもこの間がなければ、また避けることになっていったと思う。

松浦さんの出張の間、樋口さんのヘルプに入っている。相変わらずタイトな割り振りをされるけど、すごく残業をしないといけないわけではない。

過去の資料整理はあまり頭を使わないし、デザインや企画など、見たことのないものを発見する楽しみがあったりする。他の人に心配されるほど仕事自体に不満があるわけじゃない。

それでも仕事の合い間、家で一人の時。考えるのは松浦さんのことばかり。好きか嫌いかで言えば、多分好きな方だと思う。でも、それで付き合うかといえば……それ以上を考えようとすると、思い出したいくない過去が顔を覗かせる。

それが怖くて、考えるのをやめてしまい、結局結論にたどりつけない。このままじゃ、ずっと答えが出せない気がする。

「待つってどのぐらいの期間かなあ」

一人つぶやいてみても、わかるはずもない。

考えるようになって気がついたこともある。私は松浦さんがどういう人なのかをあまり知らない。話すようになったといっても、それはここの二、三ヶ月のことであり、それまで知っていたのは隣の部署の先輩で、『スキんシップ魔王』だったことだけ。

近づいては私の反応を楽しんでいる節があった。耳元で喋られたり、過剰に近づかれたら誰だって動揺する。でも、私以外の人と話す時にも体の一部を触っていたりするけど、そういう時は別に白いままだから害がないんだよね。私にだけは違う接し方、していたってことなのかな。

木曜日まで樋口さんの仕事をやって、金曜日の今日からは新しく参加することになったプロジェクトの方に入る。

「七瀬さん。おはよう」

「あ、おはようございます」

朝一から会議があると聞いていたので、会議室の鍵を借りに行こうとしたところで樋口さんから挨拶をされた。

「昨日までのやつ、チェック終わりました。きれいにまとまっていて見やすいよ」

「はい」

最初に頼まれた分は、細々と修正を言い渡されたけど、どうやら最後はその経験が役

に立ったらしい。

「また機会があつたらよろしく」

どこか陰りを含んで見えるのは、少し長めの前髪のせいか、眼鏡のせいか。それとも、投げかけられる視線のせいか……。でも、見られるぐらいなら実際に手を出されるよりはマシだし。今回の手伝いはこれといった問題もなく無事に終えられてよかった。

ほっとしてから気持ちを切り替えて会議の準備に動き出す。松浦さんが出張から持ち帰った案件を元に行う会議らしい。うちの部署からは私と相川さんだけ。あとは松浦さんも含めデザイン開発部から五名。

朝の挨拶とともにメンバーが揃い、松浦さんが資料まとめて少し遅れている間に簡単なメンバーの紹介をしてもらった。それが終わる頃に松浦さんが小脇にいろいろと抱えて入ってきた。

「まだ、始まってないですか？」

「松浦君がいないと始まらないだろう」

「ですね。遅れてすいません。資料、一部ずつ取りながら回してください」

松浦さんは他の書類を置いて席につき、私は資料が回ってくるのを待つ。その間に松浦さんが思いつきりこつちを見ているのを感じた。なんとなくわかるけど、そのまま見返すこともでない。チラリと盗み見た瞬間に目が合ってしまった、松浦さんは満面の笑み

を向けてくる。

慌てて顔ごと逸らした。会議の場であの笑顔はないでしょう。それに……顔見たら思い出しちゃった。

回ってきた資料に目を通すふりをして、必死に顔を隠した。フラッシュバックしたキスシーンのせいでものすごく顔が熱い。必死に資料の文字を追いかけて、意識を仕事の方へと戻す。

私の動揺なんてお構いなしに、資料が行き渡ったところでポーカーフェイスの松浦さんは説明を始めた。

「さっそくだけど、お仕事です」

会議が終わってすぐ、隣の相川さんが冗談めいた口調で告げてきた。

「今回の議事録作ってもらってもいい？」

「……はい」

どんなことを頼まれるのか、内心では期待していた分、ちょこつとガクツときた。

「じゃ、鍵の返却もお願いしてもいいかな？」

「それはもちろん」

それは元々やるつもりでいたことだし。

「七瀬さん」

呼びかけられて、振り向くと松浦さんがすぐ後ろに立っていた。

「あ、はい」

「そちらの部署にもお土産を買ってきてあるので、あとで僕のところまで取りに来てもらってもいいでしょうか？」

「はい。わかりました」

動揺を悟られないように、平静を装って身構えていたのに、松浦さんはそれだけ言って他の人たちと一緒に会議室を出てゆく。

ふ、普通だった。何もなかったみたい。会議の始まる前の視線のせいで警戒しちゃったじゃない。それなのにあんなにも普通だと……。あんまり大したことじゃなかったのかな、私とのこと。

じゃあ、私は松浦さんにどんな態度をして欲しかったの？ な、何を期待してたの。私ってば。

「七瀬ちゃん、松浦さんに何かされたの？」

会話の内容は普通だったのに、横で見えていた相川さんには私の動揺が伝わっちゃったのかな。

「えと、いえ、特には何もないですよ。前に相川さんと三人でレストコーナーで一緒に

なつてから、話すようになったんですけど、まさか仕事で一緒になるなんて思ってた。少し緊張しているような……そんな、感じですよ」

なんか言い訳じみた説明になってしまった。でも、告白されたことまでは話せない。

「まあ、困ったことがあるなら、いつでもいいからお兄さんに相談しなさい」

松浦さんとの微妙な空気を読み取る相川さんが、さっきの私の言い訳を素直に信じるとは思えないけど、そこはあまり踏み込んでこない。そして、逃げ道を示しておいてくれる。

「ありがとうございます。お兄様」

軽い調子で返しながらも、心の中では深々と頭を下げた。うん、やっぱり相川さんはお兄ちゃんみたいだ。

相川さんは手だけで挨拶をすると書類を抱えて会議室を出ていった。

お昼のチャイムの音でハッと我に返り、鍵を返してきてから自分の席に戻ったけど、デザイン開発部には松浦さんの姿が見当たらなかった。あとでとは言ったけど、お昼に行っちゃったのかな？ でも一応は確認しないとね。

歩く人を避けながらも、松浦さんの席へと向かった。

「なーなせさーん！」

どこからともなく名前を叫ばれて、キョロキョロとしてみると、デザイン開発部で事務を担当している女子社員がこちらに向かってパタパタ手を振っていた。

お互いに歩み寄って、会話のできる距離まで縮める。

「松浦さんからの伝言で、レストコーナーの方にいるから、ですって。これでわかる？」

「あ、はい」

「じゃ、伝えたから」

「ありがとうございます」

お財布を持っているからお昼は外で食べるのか、彼女は伝言が終わるとすぐに出口へと向かっていった。その背中を見送りながら、少し考えた。

なんでレストコーナーなんだろう。松浦さんの性格なら、私の席まで持ってきてもおかしくないのに、取りに来て欲しいと言われたのも意外だった。更に別の場所へと呼び出すなんて、勘繰りたくもなる。

お昼休みは社員食堂か、屋上テラスに人が集中する。他は自分の席だったり、外食で外へ出ていたり、レストコーナーに人がいることはあまりない。

今だって、給湯室から戻ってくる人とはすれ違うけど、その奥のレストコーナーへ向かう人は私だけ。たどり着いてみても、そこにはやっぱり一人しかない。

ずっと出入口を見ていた顔は私を視界に入ると微笑んだ。

「ひよりちゃん。こんにちは、久しぶりだね」

喋りだすと嬉しそうなのが伝わってきてしまう。

「お疲れさまです。久しぶりと言われても、三日ですよ。……出張はお疲れさまでした」

「三日って言うけど、告白をした直後に三日間会えないのは寂しいよ」

会議の時に見せたのとは全然違う姿。やや大人気ない口調。どっちが本当の松浦さん？

「さ、座って。ここ」

松浦さんは自分が座っている隣に視線を投げかけてから手招きをしてくる。間隔の狭いイス。前は平気だったけど……。申し訳ないと思いつつ、一つ空けた隣に座らせてもらう。

「つれないなあ」

苦笑しながらも目だけが、なんか優しい。その目を見てたら……。ふいっと逸<sup>そ</sup>らして息を吸い込む。

「あの、この前から呼び方が変わってるの気付いてたんですが、会社内にいる時は下の名前で呼ばないでください」

「じゃあ、ひよりちゃんって呼ぶこと自体は問題ないんだ」

揚げ足取りな発言に睨みつける。楽しむような口調のくせに優しい目のままだった。

「大丈夫。人がいるかくらいは見て発言してますから」

「それでも会社内は困ります」

「何か飲む？ おごるよ」

一人相撲しているみたいじゃない。騒いでいるのがバカらしいぐらいのスルー。

「何にする？」

何を言われても動じないのが羨ましい。

「……レモンティーで」

こうなったら、おごられてやる。散々、振り回されてるんだから、このぐらいはね。

自動販売機の飲み物が落ちる音が二回響くと、両手にペットボトルを持った松浦さんが戻ってきた。そして、どういふつもりなのか、さっき空けたはずの隣のイスに座る。

さっきの見てたらわかるはずなのに、近すぎるのは困るんだって。

さりげなく、一つ分の距離を取ろうと腰を上げたところで腕を掴まれた。

「逃げないで」

逃げるって、そんなつもりっ……な、なんでそんな顔するの？

結局、松浦さんの顔を見てしまったら、文句も言えず、無理に移動するのも気が引けて、そのまま座り直す。

松浦さんはそんな私に驚き、それから安堵の表情に変わる。

「逃げるのやめてくれたんだ」

「逃げるなつて、言ったのは松浦さんですよ。逃げてもいいなら遠慮なく移動しますけど」  
逃げようとするれば止めるのに、いざ逃げないと驚くって、どうしたらよかったのよ。

さっきの追いつがるような視線。それが……『置いていかないで』って、言っているように見えてしまった。

「そうなんだけどね」

嬉しそうな笑顔に戻ると、掴んでいた腕を離してくれた。それから、松浦さんの足元にあった紙袋が私の方へと動かされる。

「これは、企画部の方のお土産ね」

「係わってる人が少ないのに、わざわざすみません」

うちの部署は私と相川さんしかデザイン開発部の仕事をしていないのに、お土産なんて申し訳がない。

「あとはこれ」

更にもう一つ、さっきのよりは小さな紙袋が現れた。

「これは？」

「ひよりちゃんへのお土産」

「う、受け取れません！」

私個人へのお土産なんて困る。私はまだちゃんと返事してないのに、受け取る資格

がない。

受け取ろうと出していた手を引つ込めて、首を横に振る。受け取る意思がないのを表明したつもりだったのに、松浦さんは空いていた膝の上にそれを乗せてきた。

「……」

困ったまま松浦さんを見ると、寂しそうな表情がちらついている。ここはさっきのよう譲るつもりはない。

「とりあえず開けてみるのはどう？ 嫌なら返してくれていいから」

「嫌とか、そういう問題じゃなくてですね」

「固いこと言わないで」

松浦さんの方も引いてくれるつもりはないらしい。これじゃあ、平行線のままよね。

それだったら、開けてみて、何が出てきたとしても嫌だって言うまでよ。

紙袋から包装された箱を取り出す。返すつもりであるから、開けるのには細心の注意を払い、テープも丁寧にはがして、包装紙もできる限りぐちゃぐちゃにならないようにした。

自分でも感心するほど、きれいに包装紙を開けられた。そして、中から出てきた小さな箱。

「こ、これっ……」

小さな箱には見覚えがある。箱に刻まれている店名こそ知らないけど、入っているものなら大体の想像はつく。松浦さんは無言で開けるように促してくる。

箱に入っているのは、おそらくアクセサリー。宝飾店で商品は大体こういう箱に入れてくれる。だとしたら、値段だって……。もらえない要素が増えたけど、とりあえずは開けてから。

中にはピンクの石が付いたピアス。

「可愛い……」

無意識に発言してしまったとしか言いようがない。開けたら、きつぱりと嫌って伝えるつもりだったし。言ったあとに慌てて自分の口を塞いだ。ちらりと松浦さんを窺ってうかがから、自分の発言を後悔する。

「えーっと、今の発言はなしです」

「出張先で、偶然見かけたんだけど。見た瞬間にそれを着けたひよりちゃんの姿が浮かんだんだ。似合うだろうな、と思ったら買ってました」

あー、やっぱりなしにはしてくれない。

「でも……」

愛おしい視線を箱に向けて、そんなふうには語られたら困る。それでも、もらう資格が私には変わりがない。



私の気持ちを通じたのか、松浦さんは私の手から小箱を取った。

「ちよつとごめん」

私の方に体の向きを変えて、それから耳を隠していたはずの髪がかきあげられる。

「っ！」

突然のことに固まってしまった。髪を耳にかけるなんて、人からされたことがない。

前に付き合っていた人にだって……。動揺で動けずにいる間、松浦さんは私に構う様子もなく、手際よくピアスを取りはずす。

「ちよつ！ 松浦さん」

さすがにそこまでされて、私の体はようやく動きだす。

「動くと危ないよ」

いつの間にか、新しいピアスを着けようとしているらしい。耳元で作業しているせいで、大人しくするしかなくなってしまう。

「はい、反対ね」

「だから、私もうなんてっ！」

すぐに頬が両手で挟まれる。一瞬、松浦さんの唇を見てドキッとしてしまう。ぐいとそのまま反対の耳が松浦さんの目の前に晒さらされる。

さつきと同じように髪が耳にかけられると、着けていたピアスが外されて新しいもの

になる。

自分の意思じゃないとはいええ、一度着けてしまったピアスを返すのは失礼になる？ それにしても、松浦さんが強引すぎる。

耳から松浦さんの手が離れて、取り付けが終わったのがわかり、文句を言おうとしたら再び耳に柔らかいものが触れた。

「耳。赤くなってますよ」

「っ!!」

声に近い！ そ、それに、さつきのつて……。耳につ、耳にキスされたっ！

耳を押さえると、距離を取るために、イスから慌てて立ち上がる。

「何をっ！ ここ、会社ですよ！」

信じられない。信じられないっ！ 名前を呼ぶぐらいならまだしも、いくら人気がないからとはいえ、耳にキスをするなんて。

押さえた耳には、今までと違うピアスの感触。

「だから、人がいるかどうかは見てるよ」

「そんなことを……。もうっ！」

「わかりました。ひよりちゃんの赤くなった耳が食べちゃいたいぐらい可愛くて、社内にいるにもかかわらず、耳にキスをしてしまっすいません」

「んなっ……なっ！」

言葉にならない文句。松浦さんがさらりと、食べちゃいたいとか、可愛いとか、言うから。「ひよりちゃんを怒らせたお詫びに、そのピアスを受け取ってください」

続いた言葉にハツとする。……私をわざと怒らせた？

「やっぱりよく似合う」

屁理屈なのはわかっているのに、文句が言えなくなってしまふ。それどころか、明らかに赤くなり始めた顔を隠すために、両頬を自分の手で包む。

「そんな顔にしても、可愛いだけです」

さらに追い討ちをかけるような甘い言葉。

「出張の間、顔が見られなくて本当に寂しかったんです。電話をしようかとも悩んだんですが、ひよりちゃんを困らせたり、怖がらせたりしたくなかったから。だから、強引にプレゼントしたのは悪いと思うけど、このぐらいは許してください」

外したピアスを丁寧に箱の中に入れると、紙袋の中へとしまふ。そして、お土産の紙袋を手にとると松浦さんは立ち上がった。

そして、私の前に立つと同じ目線になるようにしゃがみこむ。

「お昼どきに時間を取らせてごめんね。ちゃんとご飯は食べてくださいね」

頬から手を離して、紙袋を受け取る。松浦さんは最後に微笑み、レストコーナーをあ

とにする。その背中を見ながら、はっと思いつく。

耳に着けてしまったピアスはもうもろうしかない。あんなこじつけをしてまでプレゼントしてくれたのに、私はそのお礼を全く言っていない。

「あのっ！」

慌てて、あとを追い廊下にいる背中に呼びかける。松浦さんはすぐに振り返ってくれた。

「ピアス。……ありがとうございます」

深々と頭を下げて顔を上げたら、松浦さんは手を振りながら歩きだしていた。

仕事終わりに、更衣室でロッカーの鏡に映る自分の耳を眺めている。

今日は定時に上がったので、更衣室内には同じように仕事が終わり、着替えている女子社員が何人かいる。いつもなら、ざわめきが気になるのに、今日は全然気にならない。

ただ、鏡に映るピアスだけが心を占めている。

「はあ……可愛いな」

文句は山ほどあるんだけど、それでも思わず口走ってしまうぐらいに可愛いピアスで、一目見た時から気に入っていた。

ただ、時間が経ってから気になるところが出てきた。選ぶセンスがいい。それにピアスの取り付けが妙に手馴れていた。このご時勢、男性のピアスも珍しくはないが、松浦

さんはしていない。と、したらいつピアスを取り外す機会があったのか……

「なんか、悔しい」

鏡に向かって喋しゃべっていても、独り言には変わらない。

「七瀬さん。さつきからどうしたんですか？」

「え？ あ、ごめん。うるさかったよね。なんでもないんだ」

人に聞かれる独り言ほど恥ずかしいものはない。隣で着替かえていたのは河野かのさん。あたりを見回したけど、独り言に気付いたのは一人だけみたいだ。

「そのピアス。可愛いですね。なんか七瀬さんっぽいですよ。何の石なんです？」

河野さんはグロスを塗りながら、上手に会話を続ける。

「何の石かな。わからないんだ」

天然石らしいことはわかるけど、ピンクの天然石ということ以外、細かいことはわからない。そこまでこだわりがあるわけじゃないから詳しくない。さすがに自分で買う時には気にするけど、もらった時には石がどうか、そういうのを聞く暇はなかったし。

「え？ わからないんですか？ ……はああん。わかった！」

「わかるの？」

「違いますよー。それ、もらい物ってことですよね？」

石の種類かと思つたら、どうやら違うらしい。むしろ触れて欲しくない方向に進んで

いる。

「あー、うん。もらったというか……交換かな」

耳にキスとピアス。高いのはどちらだろう。私も諦めが悪いなあ。

「なんだあ、じゃあ、お友だちとアクセサリーの交換とかですかあ？ 七瀬さんって可愛いのにあんまり浮いた話も聞かないし、これはスクープだっ！ って、思ったのに」

そのスクープはどこへ流される予定だったのか、気になるところではあるけど、上手い具合に勘違いしてくれたし、そこは我慢しておこう。

浮いた話もなにも、短大時代に付き合った彼氏が最初で最後。この会社に入ってからはその手のことは一切ない。

「相川さんとの噂もあったけど、近くで見れば違うのわかるしー」

あの噂うわさどこまで広がっているんだろう。相川さんに迷惑をかけなければいいんだけど。「そういう河野さんは今日デート？ いつもよりおしゃれに見えるけど」

「わかりますか？ これから彼とご飯を食べに行くんです」

すぐに顔の表情が変わる。恋する乙女、仕事モードから恋愛モードになっている。化粧を終えたところで、ロッカーからバッグを取り出し、肩にかける。

「では、お先です。お疲れさまでしたー」

「お疲れさま。楽しんできて」

ウキウキとした河野さんの姿を見送って、ほっと一安心する。

更衣室では恋愛話に花が咲くこともある。そういう時には輪に入りながらも、聞く一辺倒で、自分の話をするのではない。話を振られても、何かと理由をつけてすぐに次の人に話を振ってしまう。

私が話せるのは過去にいた一人だけ。それもいい思い出ではない。できることなら誰にも話さずにおきたい。

私が恋愛に夢を失い、人に深入りをしないようになったきっかけ。

\*\*\*

「ねえ、ぴよちゃん。ぴよちゃんも野間<sup>のま</sup>さん、いーと思わない？」

「思う！ 思うー」

高校二年になった私は、渋る両親をなんとか説得してアルバイトを始めた。学校の近くのファミレスで、そのバイト仲間<sup>仲間</sup>に大学生アルバイトの野間さんがいた。ムードメーカーでパートのおばちゃんからも人気があり、バイトの中でいつも中心にいるようなそんなん。

私がバイト初日に緊張していた時に初めて声をかけてくれたのも野間さんだった。

「ひよりちゃん。そんなコチコチだと疲れるだけだよ。ちっちゃいなあとは、思ってたけど、横に来てみて改めて実感した。本当に小さい。あ、俺は野間<sup>ひでき</sup>英樹。ここ長いからわからないことあったら何でも聞いて」

最初は名前も知らないバイト先の先輩だったから、背のことを言われてカチンときた。「でも、小さくてひよこみたいで可愛いね。ひよりちゃんだから、君は今日からぴよちゃんだ」

今まで呼ばれたこともないようなあだ名が付いて、そこからバイトにすぐ馴染み、仕事も順調に覚えていった。

バイト内では野間さんに憧れている女の子が多くて、女子同士ではよく話題に上っていた。

「来年もバイト続けるんだって」

「そうなんだあ」

大学生のバイトは四年で辞める人が多いらしい。私も来年は辞めるように親から言われているけど、文句を言わないように成績はそれなりの結果を出している。

このバイト先が好きで。付き合いたいとか、そんなことまで考えてはいないけど、野間さんに憧れていた。

バイトの入れ替わりは結構多くて、学年が変わると仲のよかった女の子も受験がある

からと辞めてしまった。私は進級と同時に親と交渉し、成績維持を条件にバイトを続けられることになった。

「びよちゃんがんばるねー」

「はい。このバイト好きですから。野間さんも私より長いですよね」

「そうそう、俺は大学入学の時にこっちに来て、一年の時からこのバイトで世話になってんの」

バイトの仲間が入れ替わっても、いつも野間さんは中心にいて、みんなの憧れのまま。びよちゃんが好きなのってバイトだけ？」

ふいに聞かれた質問は、答えるより先に来店店のチャイムが鳴って中断されてしまった。

就職活動をしている野間さんはシフトを減らしながらも辞めたりはしなかった。そして、夏休みの終わり頃、無事に内定をもらい、今までの分を取り戻すようにシフトを増やした。

「なんか、この前もシフト一緒でしたよね。どんだけバイトに命かけてるんですか」

「はは、命はかけちゃいないよ。びよちゃんは短大狙いだっけ？」

「はい。推薦入試終わったら、バイト三昧どんまですから」

「えー、そこは彼氏とデートとかじゃないの」

野間さんは誰とでも仲よくて、みんなに優しい。だから、期待なんかしない。

「バイトが彼氏です」

「なにそれ、バイトに命がけもやだけど、それもやだなあ」

冗談を言い合うのも、ただ単にバイトで一緒だった時間が長かったからだと思っていた。

「やった！」

十一月の半ば、推薦で狙っていた短大に無事に合格。

「おめでとー！ お互いがんばったよね」

合格して最初のバイトで、まず野間さんがお祝いをしてくれた。それに他のバイト仲間。店長はお花まで準備してくれていて、益々バイト先が好きになった。

「で、バイトは続けるの？」

ホールが落ち着いている時間に、野間さんにそう聞かれた。

「はい。続けますよ」

前に一度はバイト三昧と話をしたのに、忘れちゃったのかな。私だって話したことを全部覚えてるわけじゃないから、しょうがないけど。ちよっと……寂しいなあ。

「ほら、バイト三昧って言ってたけど、彼氏じゃないにしろ友達と遊んだりするのに忙

しくないのかなあって、思ってたさあ」

沈みかけた私は現金にもすぐに浮き上がる。

「学校よりバイトの方が楽しいんですよ。もちろん、学校に友だちはいるけど、まだ一般受験はこれからだし、就活中の子もいるから、あんまり遊んだりはしないんです」

「そっか、そっか。続けるならいいんだ」

ドキッとしてしまう。期待はしないつもりでいたのに、受験という一つの大きな問題が解決すると、別のことを考える余裕ができてしまう。

「野間さんはいつまでバイトするんですか？」

「んー、できるだけギリギリまで」

野間さんと一緒にバイトするのもあと四ヶ月だけ。

「ぴよちゃんは？」

「私は二月いっぱいかもしれないです」

行きたかったデザイン系の短大は都内にあって、卒業後には一人暮らしをする予定でいる。卒業をしてからは、引越しながらで忙しくなるからバイトは二月までが限界。

「そうだ。合格祝いも兼ねて、今日の帰りおごるよ。今日は八時で上がりでしょ。俺は七時までだから待ってるよ」

「え？」

「もちろん、ここ以外でね」

野間さんはフロアの床を指差した。このファミレスではないってことらしい。そんな冗談に笑って、誘ってもらえた嬉しさはなんとかごまかす。

バイトが終わってから向かったのはファーストフードだったけど、野間さんと二人っただけで十分に楽しかった。あつという間に時間が過ぎて、終わってしまうと今度は寂しさがやってきた。

それから、バイトが終わってから野間さんとファーストフードでご飯を食べて帰ることが増えた。帰りが遅くなると親を心配させるって理由で長い時間はいられなかったけど、帰るまでの時間、私は必死に喋しゃべっていた。

そして、二月になったある日。

「ぴよちゃん」

「なんですかー？」

バイト後のファーストフード。お決まりになりつつある窓際の席に並んで座っていた。

「あのさー。俺、運転も好きだし、車あれば都内とかすぐだと思っただよ」

「……はい」

なんのことかわからず、首をかしげながら返事をする。

「つまり、その……。少し遠距離になっちゃうかもしれないけど、俺と付き合わない？」  
 ここ最近、一気に距離は近づいたと思っていた。野間さんは相変わらずムードメーカーで、女の子からも人気で、バイト仲間には私より可愛い子も、野間さんと年齢の近い女子大生もいる。なのに、野間さんが私を？

「……いいんですか？」

「いいから告白したんだけど」

少し怒ったように見えて私は慌てた。だって、信じられないから。

「で、どう？」

「……えっと、お願いします」

憧れの人から告白をされた。私を選んでくれた。

バイト先では週に四、五日顔を合わし、会えない日には電話をして。休みの日にはデートもした。初めて、男の人と付き合う。ドキドキの毎日。メールが来るだけで嬉しい。顔を見ると幸せ。

あと少しでバイトが終わる。そしたら、毎日会うのは難しい。引越してしまえば、もつと会う機会は減っちゃう。

「びよちゃん」

ファーストフードで一緒に過ごして、家まで送ってもらう途中。真剣な顔で呼びかけられた。人気のない住宅街の路上。電信柱の陰で初めてキスをした。震える手をぎゅっと大きな手が包み込み、幸せに満たされた。

それから、別れ際には必ずキスしてくれるようになり、触れるだけだったキスも次第に深くなっていく。満たされた毎日が、これから始まる遠距離恋愛を不安に感じさせる。

「よーし。これで終わりかな」

三月に卒業式が終わり、親とお姉ちゃんに手伝ってもらい、業者に頼んで引越したのが昨日。今日は手で運ぶ細かいものを野間さんが車で運んでくれた。

「ありがとう。英ちゃんも忙しいのにごめんね」

「何言っただよ。このぐらいは全然平気だし」

呼び方も野間さんから英ちゃんに変わった。英ちゃんは就職先の入社準備で忙しいらしい。課題とかもあるみたいで、それもやらないといけないのに、今日は手伝ってくれた。

「……寂しくなっちゃうな」

「びよちゃん」

言うつもりじゃなかったのに、堪えきれずに漏らしてしまう本音。すぐに英ちゃんは抱きしめてくれる。わかっている、寂しいのは私だけじゃないって。

「……俺のものにしたい」  
耳元の囁きで、体中の血が沸騰したように熱くなった。その言葉の意味がわからないほど子供じやない。

雑然とダンボールが積まれた部屋の奥には、昨日の引越しでお父さんが組み立ててくれたベッドがある。

「ダメかな？」

抱きしめられた腕の中で首を横に振る。

夕日が差し込む部屋のカーテンを閉める。そこから無言のまま英ちゃんは次々に服を脱いでいく。最後にトランクス姿になると、ベッドで緊張する私にキスをしてくれた。

「んっ……」

いつもなら、触れるだけのキスから徐々に深くなるのに、今日はいきなり深いキス。

「びよちゃん。……好きだよ」

甘い囁きに心臓が跳ねる。キスをしたり、頭を撫でたりしながら、英ちゃんに服を脱がされて、私もブラジャーとショーツだけになる。

「怖い？」

そう聞かれて、本当は怖かったけど、ゆっくりと首を横に振った。

「バカ、こういう時は嘘つくな。俺……優しくするから」

たどたどしくブラジャーのホックが外されると、緩んだブラジャーがすぐに取り除かれる。

「触るよ」

おずおずと伸びてきた手が胸を包み込んだ。

「んっ」

「ご、ごめん。痛かったか？」

「ちがつ……びっくりしただけ」

英ちゃんはほっとした顔を見ると、もう一方の手も胸に伸ばしてくる。手で胸の感触を確かめるように、弱く強くと揉まれる。

「……くうん……」

しばらくすると、自分から漏れる吐息が我慢できなくなってきた。

「びよちゃん。見て」

言われて閉じていた目を開けると、絞りあげられた胸の先はピンと立っている。

「っ！」

「これは、びよちゃんの体が気持ちいいって言ってるんだ。恥ずかしがるなよ」

「ふあっんっ！」

英ちゃんの赤い舌が頂に伸びたところで、再び私は目を閉じた。



「あんっ……」

溢れる声は抑え切れず、口から零れていく。

「ふうん……ああ……」

口に含まれ、唇できつく挟みこまれる。緩やかだった英ちゃんの攻めも私が慣れてくると、次第に大胆になっていく。

「あう……やあ……」

唇と指が両方の胸を攻めてくる。頭がぼーとしたところで、英ちゃんの手がショーツを掴み、するりと脱がしてしまった。

「は、恥ずかしい……」

「ぴよちゃんが痛くないように、ちゃんと準備しないと」

「あっ！」

指が割れ目に触れた瞬間にビリッと電気が走ったような衝撃を受けた。自分でもお風呂以外では触ることのない場所を……

「あんまり力入れないで。って、言われても無理だよな」

英ちゃんは優しくキスをしながら、私の割れ目をゆつくりと、指で触って何往復もさせる。

「ふう……んんっ……」

吐息ごと英ちゃんのキスに吞まれて、腿の力は次第に抜けていった。

「指、入れるよ」

そう言われて、また力が入る。

「くっ！」

ゆつくりと指が中に入る感触は、恐怖とわずかな痛みをもたらす。指を根元まで入れられると、しばらく慣れるまでそのまま止まっていってくれる。

「ん……」

「もう、痛くないか？」

「……平気だよ」

指の感触に慣れてくると、今度はゆつくりと動き始める。

「やあ……んんっ！」

胸で感じるのとは、違う感覚が襲う。

「いいんだよ。怖くないから、俺に任せて」

耳元で囁かれて、そっと頷く。これまで私を気遣ってくれた英ちゃんなら信じられる。

「ああ……はあ……んんっ」

中で動く指の付け根が時折、蕾を掠める。

「これ、いじられるのがいい？」

何度も反応していたせいか、英ちゃんは中から指を抜くと、今度はその蕾だけが攻めてくる。

「あっ！ やあ……だめ……」

「腰が動き出してる。いいんだよ。そのまま感じて」  
動き出す腰の動きを止められず、与えられる刺激が気持ちいいのかもわからなくなってくる。

「英っちゃあん……なんか、……変なの……」

「どうしたの？」

何かわからないものが上り詰めてくる。言葉では説明のできない、何が。

「怖い……」

「俺がいるから怖くないよ」

その言葉に安心すると、一気に感覚が鋭くなる。

「やあ……あんっ……あんっ……んんっ」

「いいよ。ぴよちゃん。いっていいんだよ」

いくつて何？ 私、どうなっちゃうの？

「やあ……もっ、くう……英ちゃんっ！ やあー!!」

自分でも抑え切れない声を上げると、一気に上り詰めて、頭が真っ白になる。

「これがいくつてことだよ。ごめん、俺……もう」

なんだかわからない疲労感に、体に残る快感。初めての体験。英ちゃんを見ると、トランクスははちきれそうなぐらいに盛り上がっている。

「えっと……そ、それ」

英ちゃんの苦しそうな表情はこれのせいなの？ そっと、触れる前に英ちゃんは自らトランクスを脱ぎ去った。

「きゃっ！」

想像はしていたけど、思った以上のものに驚いてしまう。

「こ、これが？」

さっきは指だったけど、今度はこれが……本当に入るの？ 動揺する私に背を向けて、英ちゃんはゴムを着けている。

「ゆっくりするから」

腰が掴まれると、割れ目と英ちゃんのもの徐々に近づく。恐怖で動けない私に先っぽが触れた。

「んっ……」

指でした時のように、英ちゃんのもは何度も割れ目を往復する。次第にヌルヌルになり始めたのは、私の？

「くっ！」  
ぬるつと滑ったように、先が少しだけ割れ目を押し開いた。

「やあ……こ、怖い……」

英ちゃんのが、中に入ろうとしてる。更に少し奥が開かれていく。

「んっ！ っ!!」

指の時とは違う痛みが鈍く広がり始める。

「ごめん。最初だけだから、もう少しだけ我慢して」

「あんっ！」

ゆつくりと、少しずつ英ちゃんのが入ってくる。突き刺されるような感覚に、付きまとう痛み。こんなのが気持ちよくなるの？

下唇を噛みながら、痛みが和らぐまで堪える。しかし、慣れたところで、更に奥が広げられる。

「うん……」

目をギユッと瞑ると、少しだけ涙がこぼれる。

「ごめ……」

英ちゃんの手がそつと頬を撫でた。その手に少し縊り、我慢を続ける。

全てが入りきったところで、英ちゃんはぎゅつと抱きしめてくれた。胸と胸が直接触

れあい、肌同士が直接触れる感触を味わった。

「ぴよちゃん。大事にするから」

最初に感じた恐怖は、だいぶ和らいできた。鈍い痛みは残るものの、それもわずかになっている。

「そろそろ、動いてもいいかな？」

もつと待って欲しかったけど、英ちゃんの苦しそうな顔を見て、頷いてみせた。

「んっ！」

引き抜かれる時に内側の皮膚まで引っ張られて、別の痛みが走る。休む暇もなく、また奥まで入ってくる。

「いっ……」

永遠に続くのかと思った痛みに変化が訪れた。

「はあ……」

痛みと、新たな感覚が交互に押し寄せて、痛みは徐々になりを潜めてゆく。それがわかるのか、それに反比例して、英ちゃんの動きは激しさを増していった。

「んっ……あっ……あんっ……」

自分が出してるとは思えない声が耳につく。

「そろそろ、俺……」

「いいよ。英ちゃんも……、気持ちよくなって」  
 挿れられるのは気持ちいいとは言いい切れないけど、その前に英ちゃんは私を気持ちよくしてくれた。だから、今度は私の番。

「んっ……いくぞ……」

膝頭を持って、開かされる。英ちゃんの腰が浮いた。繋がっている私の腰もそれに合わせて少し浮く。

「あんっ！」

引き上げられると、さっきよりも少し奥まで入ってくる。

「痛かったらごめんっ」

苦しそうな声のあと、今までにない勢いで英ちゃんの腰が打ち付けられる。

「んっ！ あんっ！」

英ちゃんも吐息を漏らし、私は悲鳴みたいな声を上げながら、さっきまでとは違うものを感じる。

「くっ！ い、いくう！」

英ちゃんの宣言のあとに、中で英ちゃんのがビクビクと震えるのを感じた。

初体験は、これから始まる遠距離恋愛の不安を取り払ってくれた。四月に入り、英ち

ゃんはすぐに入社式があり、社会人になった。

私も入学式が終わると、新しい生活がスタートした。毎日メールをして、寂しい時には電話をした。土曜日か日曜日には来てくれて、デートをしたり家で過ごしたり、英ちゃんとの時間は私を幸せな気持ちにしてくれる。

短大の勉強もしつつ、近くのファミレスでアルバイトを始めた。経験のある仕事の方が安心できるからだけど、前のバイト先みたいな温かな雰囲気ではない。

高校の時には学校よりバイトだったけど、短大ではバイトよりも学校の友だち付き合いの方がメインになり、半年も経つと親友と呼べるまでの友達ができていた。三枝小百合は、私と同じく県外からの入学で、一人暮らしをしている。最初のきっかけは忘れたけど、気付けばいつでも一緒にいるようになっていた。

「今度、ひよりの彼氏見てみたいな」

「うん。いいよ。私も小百合を紹介したいし」

「ラブラブ彼氏。楽しみにしてるわよ」

小百合との会話でもよく登場する英ちゃん。英ちゃんにも小百合の話はしているから、会ったことはなくてもお互いに話の上では知っている。

「こちらが私の友達の三枝小百合。で、彼氏の野間英樹です」

自分の彼を初めて紹介する恥ずかしさもあるけど、ちょっとだけ自慢する気持ちの方が上回っていた。

「かっこいい人だね」

こっそりと耳打ちされた言葉に私は更に舞い上がった。話は聞いているから初めて会った気がしないねと、英ちゃんが言えば、小百合も頷き、この日は初対面とは思えないぐらい打ち解けた雰囲気だった。私も、大好きな友だちと大好きな彼氏が仲良くしてくるのが素直に嬉しく思えた。

それから、英ちゃん和小百合と一緒に遊ぶことも増え、私たちの間には何の問題もないように思えていた。もちろん、二人きりのデートもしているし、小百合と女同士で遊ぶこともある。

十一月の誕生日。昼間に学校で小百合からお祝いしてもらったあと、その日は平日にもかかわらず、英ちゃんが夜にわざわざうちまで来てくれた。

「誕生日おめでとう」

「ありがとう！でも、仕事で疲れてるのに、わざわざごめんね」

遅い時間だから、外に食へには行かないで、私の部屋でささやかにお祝いをしてくれた。

「これ、プレゼント」

照れているのか、目を逸らしたまま渡されたプレゼント。

「開けていい？」

頷くのを見てから、はやる気持ちを抑えて開けてみる。

「わあ！シルバリング」

「十九才の誕生日にもらうと、幸せになるらしいぞ」

英ちゃんがこの手のことを知っているのは、ちょっと意外。

「よく知ってたね」

「実は……」

英ちゃんは、このプレゼントを選ぶのを小百合に手伝ってもらったと告げた。一緒に買いに行ったと聞いて、心がチクツとした。私のプレゼントを選んでくれたことより、知らない間に二人きりで出かけていたことに、……ほんの少し、驚いた。

小さな痛みには気付かないふりをして、私は日々を送った。そして、小さな変化。

私の誕生日以来、小百合は私たちと一緒に遊ぶのを遠慮するようになってきた。二人のお邪魔にはなりたくないから、と笑いながら断る小百合にどこかほっとしている自分を微かに疑う自分。でも、猜疑心さいぎしんに囚われるのが嫌だった。

二十歳の誕生日を迎える少し前、見たことないぐらい真面目な顔をして小百合が告げてきた。

「ひより。お願いがあるの。……英樹さんと別れて。私、彼のが好き！」  
 ひどく思いつめた表情で言われた言葉。本当は薄々と気付いていた。小百合の話をするどこかよそよそしくなる英ちゃん。三人で会うのを断る小百合。

それでも改めて聞かされたのはショックで、私はすぐに英ちゃんを問い詰めた。

「ねえ、英ちゃん。小百合が別れてって、言うの。そんなことしないよね？」

「ごめん。これ以上、ぴよちゃんと付き合うことはできない」

問い詰める私と、最後まで目を合わせず、ひたすら謝罪の言葉だけを残す英ちゃん。どんなに泣いても騒いでも英ちゃんの意味は変わらない。

英ちゃんのが好きな小百合に、小百合のことが好きになった英ちゃん。気持ちの通じ合った二人と私。邪魔なのは誰なのかすぐにわかる。いつからなのかを聞いたら、ちょうど去年の今頃。皮肉にも私の誕生日プレゼントを買いに行ったのがきっかけだったらしい。

英ちゃんは一年間、私と小百合を天秤にかけていて、最後には小百合を選んだ。

「いいよ。別れる」

私一人が嫌だと言ったところで何も変わらない。言いたくなかったけど、英ちゃんのが戻ってくる方法がわからない以上、もうそれしかない。

文句だってたくさんある。一年間どんな気持ちで私と付き合っていたのか、私一人が

騙だまされていたのも悔しい。二人を恨む気持ちだつてある。

それでも、英ちゃんを好きで幸せだった時間がある。小百合と一緒に遊んで楽しかった。その思い出まで失いたくなくて、言いたいことは呑み込んだ。

彼氏と一番の友人。同時に失ったことは大きいけど、時間が経つとともに、こうなったことには自分にも原因があるように思えてきた。小さな変化を見て見ぬふりをして、彼を繋ぎとめる努力もしていなかった。

すごく傷ついたけど、許せると思つたら二人に笑顔で「おめでとー」って伝えるんだ。今はまだ無理でもいつか……

英ちゃんと小百合のことに、散々、打ちのめされたけど、現実には就職活動がある。就職氷河期とか言われてる今、のんびりとしていられない。難関企業も含めて、いろいろな企業を調べた。立ち止まってはられない。

辛い思い出を忘れるように、就職活動に熱を入れ、卒業に向けての勉強に打ち込んだ。そのかいがあったのか、先生からも望みが薄いとされていた、一番の難関だった企業から内定が来た。モバイル機器開発をする、大企業の系列会社。その知らせが私を元気にさせてくれる。

少しずつだけ、英ちゃんと小百合のいない生活に慣れてきた。私の短大生活にはず

つと英ちゃんと小百合がいた。ぽっかりと大きく空いた穴が少しずつ、少しずつ埋まっていくなかった。

年を越し、卒業も無事にできることがわかった二月。もう学校で会う機会も減つてく  
る中、数人の友人と約束をしてお昼を一緒に食べることにした。

お互いの就職報告やら、まだ内定がなくて就職活動中とか、そんな話の合い間に飛び出した話題。

「そういうえば、三枝さん、彼氏と別れたみたいだよ」

英ちゃんも小百合とも、もう連絡を取っていない。ただ、小百合は同じ学校で、この場にも共通の友だちがいる。ただその友だちも小百合に彼氏ができたことは知ってはいても、その相手が元は私の彼氏だったことまでは知らない。

唐突に聞かされた内容に、私は食事の途中にもかかわらず、その場から逃げ出した。頭はぐちゃぐちゃで、涙は止まらず、部屋に戻ってからもひたすら泣き続けた。

こんな結果のために私は英ちゃんと別れなくちゃいけないかったの？ あのと二人にもいつかは別れが訪れたかもしれないけど、それはもつと先であって、こんなに早く来るものじゃない！ 私はなんだったの？

英ちゃんにも小百合にも確認はしていない。でも友情も愛情も私にはわからなくなつた。

いつかは二人を祝うはずだった。

時間とともに、いつかは過去の思い出になるはずだった。

小百合に別れて欲しいと言われた時よりも、英ちゃんから謝られた時よりも、たった数ヶ月で別れてしまったことが、なによりも辛い。

そこから卒業までのことはあまり覚えていない。卒業に必要な単位は既に取ってあつたし、学校にはあまり行かなくても平気だった。バイトも少し早めに辞めさせてもらい、ただ部屋の中で無為に時間を過ごしていた。

就職した会社は今住んでいるところから通勤できるので今のアパートはそのまま住む予定だったけど、卒業後の春休みに実家に戻ってきた。

食べるのも最小限だったから、体重も減って、家族に相当驚かれた。お姉ちゃんは仕事のない土日には必ずどこか外に私を連れ出し、何も聞かずに一方的にいろいろと喋り続けてくれる。

毎日出る食事。お母さんから食べなさいと怒られて少しずつ食事も取り始めた。誰にも話はできないけど、短大に入ってからあまり帰ってきてなかったのに、家族のそばはすこく落ち着く。ここには変わらないものがあるから。お父さんとお母さんとお姉ちゃん。

入社式の二日前まで実家で過ごし、いくらか体重も増えた。最後まで何も聞かずにい

てくれた。お母さんは聞くタイミングを窺<sup>うかが</sup>っていたけど、そのうち察してくれたのか何とも言わなかった。今はまだ口にすることはできない。

入社してからは、人と距離を置くようになっていた。怖くて近付けない。でも、はみ出すようなことはしたくなくて、なんとなく人と合わせる。

高校、短大と成長を期待していたのに、身長は一五〇を手前で止まったまま。大人っぽくなるはずの顔もそのまま。そのせいでいじられることが多いものの、いつしか受け流すことを覚えた。

会社内では角が立たないように、波風を立てないように、人への深入りを避ける。

同期とも、配属された部署でも、浮かないぐらいの付き合い。不自由にならない程度の距離感を保ち、特別仲の良いと言える人も作らない。

唯一、配属先で研修担当になった相川さんだけは少し違った。といっても、深入りする会話は避けたし、恋愛感情もない。

世の中の男性がすべて英ちゃんと同じというわけではない。また、小百合みたいな女性ばかりでないこともわかっている。

いつかは私も結婚をして子供を産むかもしれない。けれど、まだまだそれが現実となるとは思えなかった。

\*\*\*

松浦さんからもらったピアスを見ながら思い出した過去は、思ったより痛みも苦しきも伴わなかった。これが時間の浄化作用なんだろう。そっと耳元を撫でて、そう思うことにしてみた。少しだけ心が軽くなる。

返事をすぐにできないのは、付き合いでもいいってことなのか。

返事をすぐにできないくらいなら付き合いのをやめた方がいいってことなのか。

答えを出そうとすると、その相反する二つの気持ちがおつかり合ひ、結論にはまだたどり着けない。松浦さんの私に対する気持ちは伝わっている。だけど、いつかその気持ちに離れてしまう気がして怖い。

「ひよりちゃん」

タイミングを見計らったように、いや、多分わざとなんだろうけど、私が一人給湯室にいたり、レストコーナーへ向かうと松浦さんは現れる。

「お疲れさまです」

今日もコーヒーを入れようと、給湯室に来たところで、松浦さんがやってきた。遠慮

## 立ち読みサンプル はここまで